シルクロード・ネットワーク・横浜フォーラム２０２３

シルクロードでつなぐ街と人

絹遺産は私たちの宝

山手ベーリック・ホール（設計：J.H.モーガン）　撮影：米山淳一

２０２４年３月１６日（土）
見学会：横浜山手地区周辺
２０２４年３月１７日（日）
フォーラム・基調講演・事例報告
会場：横浜みなと博物館

主催：シルクロード・ネットワーク協議会
共催：公益社団法人横浜歴史資産調査会・NPO 法人街・建築・文化再生集団（RAC）
協力：横浜市都市整備局都市デザイン室
後援：公益財団法人横浜市緑の協会・一般財団法人大日本蚕糸会

ー開催地・横浜より、ごあいさつー

2015 年シルクロード・ネットワークが発足し第 1 回フォーラムが横浜市で開催されました。途中コロナ蔓延のため中止・延期などがありましたが、今回の開催は組織としては 10 年目の年となり再び横浜での開催となりました。

ご存じの通り、横浜はシルク産業の要の地でもあり横浜の発展もシルクとともにあったといっても過言ではありません。

1886(明治 19 年)に原善三郎らをはじめとする横浜商人らを発起人として川崎～八王子間に八王子地方に集積した織物や輸出生糸の輸送を目的に敷設出願された武蔵鉄道は紆余曲折の末 1908 年に八王子～東神奈川として開通をしました。さらに湾内に延伸され、道路と鉄道の 2 つのシルクロードそして海外への航路としてのシルクロードが形成されました。

時を前後して横浜開港 150 周年事業で実施された像の鼻パークは横浜港の発祥の地でもあり、パークの整備工事中に発見された鉄軌道と転車台は明治 20 年代後半に整備され生糸や織物など港の荷役作業を行うために設けられたとされています。また横浜開港 100 周年を記念して建設されたのが、シルク博物館が入るシルクセンター国際貿易観光会館です。

横浜の地場産業の 1 つに横浜スカーフがあります。横浜スカーフは、横浜開港以来盛んになった生糸の輸出の流れの中で生まれたシルク 100%のスカーフであり、世界最高水準の技術で織りなす横浜スカーフは、世界に冠たるナショナルブランドでもあります。

横浜開港からの歴史的発展が多々もたらした発祥の地・もの・ことは、世界における日本の枢要の地としての役割を果たしてきたことを様々な形に表してくれています。その 1 つがシルクであり、今改めて様々な視点からその赫々たる所産を想い起こす必要があるでしょう。

シルクロード・ネットワークは、東北、上州、信越など各地から運ばれ形成されてきた絹産業により発展してきた横浜を基軸として、それら歴史的遺産や受け継がれてきた技術やデザインを忘れず絶やすことなくそれぞれの地域の誉としてさらに磨き上げていくことを目的として組織されました。

発足 10 年目の記念すべき年を迎え再び横浜市において開催する意義は大きく、絹文化の歴史をしっかりと受け継ぎそして新たな絹の歴史を創出していくことが今まさに求められているといえましょう。これを機会に 10 年間の各地での多彩で活発な活動を改めて思い返し、次の 10 年に向けて各地域の絹文化振興とさらなるネットワークの連携強化が図られることが期待されます。

令和６年３月１６日

シルクロード・ネットワーク協議会代表幹事団体

公益社団法人　横浜歴史資産調査会

会　長　古賀　学

クイーンとジャックを従えるキング（県庁）　撮影：米山淳一

－横浜フォーラム開催によせて　シルクロードを結ぶ横浜と前橋－

シルクロード・ネットワークは、2023 年度の横浜フォーラムで設立後 10 年になんなんとする歩みを印すことになります。第 1 回は同じ横浜で開催されましたが、絹遺産をキーワードに多様な活動を展開している各地からの報告にこめられた思いが、開港記念会館 1 階の大講堂にあふれんばかりであったことを思いだします。その後、新庄市、福島市、鶴岡市、南砺市、昨年の神戸市と、フォーラムは各地で開かれてきました。今年はふたたび横浜市に回帰することになりましたが、ここからまた新たに一歩を踏みだそうという意図と意志が、「シルクロードでつなぐ街と人：絹遺産は私たちの宝」という今回のテーマに読みとれる気がします。

横浜は、江戸時代末期の開港とともに、当時の小さな村から一気に日本を世界と結ぶ国際的な場となりました。想像するに、その横浜では、開港からときを置かず、世界が意識されていたのではないでしょうか。国際都市は、すでにこのときから横浜に相応しかったのかもしれません。その横浜から世界に拡がった生糸の一大生産地のひとつに前橋がありました。紆余曲折はあるものの、前橋は 17 世紀からの城下町で、その意識が支えてきた都市です。19 世紀中頃からのヨーロッパで、質の良い生糸は「前橋（’Maebashi’あるいは’Mayabashi’）」と呼ばれたといわれますが、前橋がどこか、知られてはいなかったでしょう。明治初めの前橋でも、生糸が繋ぐ世界に思いを馳せたのは、生糸を生業として活動した商人くらいではなかったかと思います。

ところで、横浜は関東大震災と太平洋戦争の戦災と、2 度の惨禍を経て、現在が形成されています。一方前橋は、やはり戦災ともうひとつ、養蚕・製糸業からの転換という社会の変化がまちをドラスティックに変えてきました。このような経緯のなか、どちらの都市も、絹遺産に限らず、過去から継承してきた資産は潤沢というわけではありません。しかし、私感からすると、横浜では、途切れがちになりやすい遺構も含めた建築物、土木構築物、さらに史料や記録などの歴史的資産を、都市の記憶を軸により太い幹に育てていく努力が積み重ねられてきたように思われます。他方、前橋では、切れぎれとなりがちの要素を、これまで接ぎ木してきたという印象を抱かざるを得ません。現在「歴史まちづくり計画」が実施に移されていますが、接ぎ木が挿し木にならないようにと願うばかりです。同じ絹遺産が都市の基礎を成し、また共通する過去からの断絶を乗り越えてはいますが、ふたつの都市は、興味深い対照を形作っていると感じています。

シルクロード・ネットワークの第 7 回フォーラムが、再び横浜で開催されますこと、関係者のみなさまのご尽力に、感謝申しあげます。また、各地よりご参加のみなさまにも感謝いたします。最後になりますが、（公財）横浜市緑の協会様、（一財）大日本蚕糸会様をはじめとしまして、ご後援、ご協力いただきました関係各位に、つつしんで感謝申しあげます。

NPO 法人　街・建築・文化再生集団（略称 RAC）
理事長　星　和彦

『蠶やしなひ草』三代目国定
（香朝楼）筆
兵藤喜孝氏所蔵

ー横浜だよりー

ヨコハマヘリテイジは公益社団法人横浜歴史資産調査会の愛称です。横浜市都市デザイン室と両輪になって横浜の「歴史を生かしたまちづくり」を推進するために昭和６３年（１９８８）に発足しました。その後、平成２１年に神奈川県認可の一般社団法人、平成２５年に内閣府認定の公益社団法人になり、テリトリーは神奈川県内から全国に広がりました。

その時に取り組んだのがシルク文化。故人となった西和夫先生（神奈川大学名誉教授）が横浜は、「シルク文化で発展したことを忘れている」。ぜひ、ヨコハマヘリテイジで取り組めとの力強いお言葉を頂きました。これを受け、先ずは市内の絹遺産を把握。当時は見渡せば、生糸検査場、帝蚕倉庫、三井物産横浜支店倉庫、赤レンガ倉庫、氷川丸、三渓園、港の鉄路、山手西洋館群ほか様々な横浜の地域遺産とも言える絹遺産が市内に溢れていました。すでにそれらの調査や保存、活用に向けた取り組みは様々な形で行われていましたが、姿を消した歴史的建造物もありました。

そんな中、日野市の蚕糸試験場の調査や保存運動が陣内秀信先生（法政大学教授）、お弟子さんの上村耕平氏らによって広がりを見せ、絹繋がりでヨコハマヘリテイジに協力依頼が来たのです。日野市を巻き込んでの講演会、シンポジュームが開催されました。これを機にヨコハマヘリテイジは、理事会、総会の合意を受け、シルクロード・ネットワーク協議会を設立。RAC（NPO 法人街・文化・建築再生集団）との共同歩調でシルク文化を将来に亘り継承して行く覚悟を決めました。その後、日野市は蚕糸試験場を絹遺産として取得し、保存活用を目指しております。

以来、１０数年、ゆるりとではありますがシルクロード・ネットワーク協議会は、仲間を増やしつつ歩んでいます。

写真 1. 横浜市郊外の養蚕民家・旧横溝家住宅

写真 2. 北仲、帝蚕倉庫事務所棟

写真 3. 汽車道と水陸両用バス

この項、写真撮影は全て米山　淳一

今回、ご登壇の白川郷（岐阜県）の三島敏樹さんが紹介される合掌造りは、養蚕民家なのです。白川郷や五箇山の繭は城端に運ばれて生糸になり、城端線、北陸本線、信越本線、高崎線、東海道本線を経由して横浜にやってきました。いや、信州や東北各地をはじめ全国各地の生糸が我が国鉄道発祥の地、横浜に鉄道で運ばれました。生糸検査場で精査され、上質の生糸として外貨獲得に大いに貢献し、我が国の近代化の原資となったのです。レイルロードはシルクロード。そしてすべての道は横浜へ続くと信じて事業を推進してまいります。引き続きよろしくお願いいたします。

シルクロード・ネットワーク協議会代表幹事団体
公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマ　ヘリテイジ）
常務理事　　米山淳一

●レポート目次●

・横浜フォーラム 2023 スケジュール　6
・見学会コース案内図　7
・見学会　山手西洋館案内　8
・講師プロフィール　10
・横浜山手の歴史を生かしたまちづくり：米山　淳一（(公社）横浜歴史資産調査会）　11
・横浜の繁栄を支えた生糸貿易：西川　武臣（横浜開港資料館館長）　13
・シルク博物館について：高橋　典子（シルク博物館副館長）　14
・田島家移築のあゆみ：三島　敏樹（旧田島家養蚕展示館館長）　16
・山形県新庄市　旧農林省蚕糸試験場新庄支場（新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」）：
加藤　明（新庄市商工観光課クールジャパン新庄推進室長）17
・未来へ紡ぐサムライゆかりのシルク：佐藤　直翔（鶴岡市企画部政策企画課）　18
・養蚕の隆盛をいまに伝える「上条集落」：飯島　泉（甲州市会計課長）　20
・信州から横浜港へ、そして世界へ－シルクロードを駆ける－：
矢島　宏雄（シルクロード・ネットワーク協議会）24
・2019 年（令和元年）フォーラム開催地、南砺からのその後：
佐々木　利幸（佐々木寺社建築株式会社）26
・第 29 回　養父市ふるさと歴史講演会の開催：谷本　進（養父市教育委員会）　29
・百草園と生糸商人青木角蔵・三堀武蔵・森田友昇：
秦　哲子（東京都日野市ふるさと文化財課日野郷土資料館）30
・絹と和紙の町・小川町の動向：平山　友子（NPO 小川町創り文化プロジェクト(まちぶん)理事）　31
・シルクロード・ネットワーク　in Yokohama　下仁田から横浜への絹の道：
大河原順次郎（元下仁田町教育委員会教育課長）33
・＜シルクロード・ネットワーク　横浜フォーラム 2023＞群馬県南牧村から：
今井泰徳（群馬県南牧村総務部村づくり雇用推進課）35
・関東のキリスト教と養蚕製糸：藤岡　一雄（NPO 法人　街・建築・文化再生集団顧問）　37
・英国で前橋生糸「マイバシ」に遭遇して～165 年前の生糸が伝えること：
藤井　美登利（NPO 川越きもの散歩・さいたま絹文化研究会）39
・生糸の街前橋：岩崎　桂治（前橋絹文化研究会）　41
・旧安田銀行担保倉庫、前橋乾繭取引所開設をめぐる考察：村上雅紀(上州文化ラボ)　43
・幕末から明治にかけて躍動した上州人：中村　武（NPO 法人街・建築・文化再生集団）　45
・シルクロード・ネットワーク・神戸フォーラム 2022 記録：　47
・シルクロード・ネットワークの活性化にむけて：米山　淳一　50
・MEMO　51

横浜フォーラム２０２３　スケジュール

1. 日程：令和 6 年 3 月 16 日（土）・17 日（日）

　　見　学　会：16 日（土）12:40～13:00 集合　13:00～16:30

　　フォーラム：17 日（日）12:40 開場　13:00～17:10

　　会場　横浜みなと博物館

　　〒220-0012 横浜市西区みなとみらい 2-1-1　tel 045-221-0280

2. スケジュール

3 月 16 日（土）見学会

12:40～13:00　みなとみらい線元町・中華街駅改札口（6 番アメリカ山公園口）集合

13:00～16:30　「絹遺産、山手の洋館を巡る」

　　ベーリック・ホール（ガイダンス）、山手 234 番館、エリスマン邸、山手 111 番館、イギリス館

17:00～19:00　情報交換会：中華街・菜香新館　tel 045-664-3155

3 月 17 日（日）フォーラム会場：横浜みなと博物館　第 1・2 会議室

12:40～13:00　受付・開場

13:00～13:15　フォーラム開会

　　開会　米山　淳一（公益社団法人横浜歴史資産調査会常務理事・RAC 理事）

　　星　和彦（NPO 法人　街・建築・文化再生集団理事長）

13:15～14:20　基調講演　『横浜の繁栄を支えた絹貿易』

　　西川　武臣氏　（横浜開港資料館長 ）

　　基調講演　『世界文化遺産「白川村合掌造り民家」は養蚕民家だった』

　　三島　敏樹氏　（白川郷田島家養蚕展示館館長）

14:30～16:30　各地からの報告（質疑応答・意見交換）

　　コーディネーター：後藤　治

　　（工学院大学理事長・公益社団法人横浜歴史資産調査会理事・RAC理事）

　　報告者：山形県鶴岡市、新庄市、群馬県前橋市、南牧村、埼玉県川越市、

　　東京都日野市、神奈川県横浜市、富山県南砺市他

16:30～17:00　質疑

17:00～17:10　閉会・総括　後藤　治

見学会コース　　横浜山手西洋館マップ　　（公益財団法人横浜市緑の協会作成マップを転載）

見学会　山手西洋館案内

各西洋館の説明は公益財団法人横浜市緑の協会公式サイトより転載

①　ベーリックホール

写真：米山　淳一

イギリス人貿易商 B.R.ベリック氏の邸宅として、昭和 5（1930）年に設計されました。第二次世界大戦前まで住宅として使用された後、昭和 31（1956）年に遺族より宗教法人カトリック・マリア会に寄贈されました。その後、平成 12（2000）年までセント・ジョセフ・インターナショナル・スクールの寄宿舎として使用されていました。

現存する戦前の山手外国人住宅の中では最大規模の建物で、設計したのはアメリカ人建築家 J.H.モーガンです。モーガンは、山手 111 番館や山手聖公会、根岸競馬場など数多くの建築物を残しています。約 600 坪の敷地に建つベーリック・ホールは、スパニッシュスタイルを基調とし、外観は玄関の 3 連アーチや、クワットレフォイルと呼ばれる小窓、瓦屋根をもつ煙突など、多彩な装飾が施されています。内部も、広いリビングルームやパームルーム、アルコーブや化粧張り組天井が特徴のダイニングルーム、白と黒のタイル張りの床、玄関や階段のアイアンワーク、また子息の部屋の壁はフレスコ技法を用いて復原されていることなど、建築学的にも価値のある建物です。

平成 13（2001）年に横浜市は、建物の所在する用地を元町公園の拡張区域として買収するとともに、建物については宗教法人カトリック・マリア会から寄贈を受けました。復原・改修等の工事を経て、平成 14（2002）年から、建物と庭園を一般公開しています。

②　山手 234 番館

昭和 2（1927）年頃に外国人向けの共同住宅（アパートメントハウス）として、現在の敷地に建てられました。ここは関東大震災の復興事業の一つで、横浜を離れた外国人に戻ってもらうために建設された経緯があります。設計者は、隣接する山手 89-6 番館（現「えの木てい」）と同じ、朝香吉蔵です。

建設当時は、4 つの同一形式の住戸が、中央部分の玄関ポーチを挟んで対称的に向かい合い、上下に重なる構成をもっていました。3LDK の間取りは、合理的かつコンパクトにまとめられています。また、洋風住宅の標準的な要素である、上げ下げ窓や鎧戸、煙突なども簡素な仕様で採用され、震災後の洋風住宅の意匠の典型といえます。

第 2 次世界大戦後の米軍による接収などを経て、昭和 50 年代頃までアパートメントとして使用されていましたが、平成元（1989）年に横浜市が歴史的景観の保全を目的に取得しました。平成 9（1997）年から保全改修工事を行い、平成 11（1999）年から一般公開しています。1 階は再現された居間や山手 234 番館の歴史についてパネルを展示しています。2 階は貸しスペースとして、ギャラリー展示や会議等に利用されています。

③　エリスマン邸

エリスマン邸は、生糸貿易商社シーベルヘグナー商会の横浜支配人格として活躍した、スイス生まれのフリッツ・エリスマン氏の邸宅でした。大正 14（1925）年から 15（1926）年にかけて、山手町 127 番地に建てられました。設計は、「近代建築の父」といわれるチェコ人の建築家アントニン・レーモンドです。

創建当時は木造 2 階建て、和館付きで建築面積は約 81 坪。屋根はスレート葺、階上は下見板張り、階下は竪羽目張りの白亜の洋館でした。煙突、ベランダ、屋根窓、上げ下げ窓、鎧戸といった洋風住宅の意匠と、軒の水平線を強調した木造モダニズム的要素を持っています。設計者レーモンドの師匠である世界的建築家 F.L.ライトの影響も見られます。

④　山手 111 番館（横浜市指定文化財）

山手 111 番館は、横浜市イギリス館の南側にあるスパニッシュスタイルの洋館です。 ワシン坂通りに面した広い芝生を前庭とし、港の見える丘公園のローズガーデンを見下ろす建物は、大正 15（1926）年にアメリカ人ラフィン氏の住宅として建設されました。 設計者は、ベーリック・ホールと同じく、J.H.モーガンです。 玄関前の 3 連アーチが同じ意匠ですが、山手 111 番館は天井がなくパーゴラになっているため、異なる印象を与えます。 大正 9（1920）年に来日したモーガンは、横浜を中心に数多くの作品を残していますが、山手 111 番館は彼の代表作の一つと言えます。 赤い瓦屋根に白壁の建物は、地階がコンクリート、地上が木造 2 階建ての寄棟造りです。 創建当時は、地階部分にガレージや使用人部屋、1 階に吹き抜けのホール、厨房、食堂と居室、2 階は海を見晴らす寝室と回廊、スリーピングポーチを配していました。

横浜市は、平成 8（1996）年に敷地を取得し、建物の寄贈を受けて保存、改修工事を行い、平成 11（1999)年から一般公開しています。館内は昭和初期の洋館を体験できるよう家具などを配置し、設計者モーガンに関する展示等も行っています。現在、ローズガーデンから入る地階部分は、喫茶室として利用されています。

昭和 57（1982）年にマンション建築のため解体されましたが、平成 2（1990）年、元町公園内の現在地(旧山手居留地 81 番地)に再現されました。1 階には暖炉のある応接室、居間兼食堂、庭を眺めるサンルームなどがあり、簡潔なデザインを再現しています。椅子やテーブルなどの家具は、レーモンドが設計したものです。かつて 3 つの寝室があった 2 階は、写真や図面で山手の洋館に関する資料を展示しています。また、昔の厨房部分は、喫茶室として、地下ホールは貸しスペースとして利用されています。

⑤　横浜市イギリス館（横浜市指定文化財）

横浜市イギリス館は、昭和 12（1937）年に、上海の大英工部総署の設計によって、英国総領事公邸として、現在地に建てられました。鉄筋コンクリート 2 階建てで、広い敷地と建物規模をもち、東アジアにある領事公邸の中でも、上位に格付けられていました。

主屋の 1 階の南側には、西からサンポーチ、客間、食堂が並び、広々としたテラスは芝生の庭につながっています。2 階には寝室や化粧室が配置され、広い窓からは庭や港の眺望が楽しめます。地下にはワインセラーもあり、東側の付属屋は使用人の住居として使用されていました。玄関脇にはめ込まれた王冠入りの銘版（ジョージVI世の時代）や、正面脇の銅板（British Consular Residence）が、旧英国総領事公邸であった由緒を示しています。

昭和 44（1969）年に横浜市が取得し、1 階のホールはコンサートに、2 階の集会室は会議等に利用されています。また、平成 14（2002）年からは、2 階の展示室と復元された寝室を一般公開しています。

特記以外の写真は、公益財団法人横浜市緑の協会公式サイトより転載

講師プロフィール

□西川武臣(にしかわ　たけおみ)

横浜開港資料館・横浜都市発展記念館・横浜ユーラシア文化館館長(公財　横浜市ふるさと歴史財団理事)

１９５５年　愛知県生まれ

１９７９年　明治大学大学院文学研究科博士前期課程修了後、横浜開港資料館設立準備室に就職、博士（史学）

１９８１年　横浜開港資料館調査研究員

２０２１年から現職

□三島　敏樹（みしま　としき）　旧田島家養蚕展示館館長

１９５９年　白川村荻町生まれ

１９８０年　家業を継ぐため白川村に帰省

２０００年　白川郷荻町集落の自然環境を守る会会長就任

２００８年　同上会長を退任

２０１５年　家業を継ぐ傍ら旧田島家養蚕展示館館長として運営にあたる。
現在に至る

□後藤　治（ごとう　おさむ）　NPO 法人　街・建築・文化再生集団理事・工学院大学理事長

１９６０年　東京生まれ

１９８８年　東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程中退、文化庁文化財保護部建造物課調査官を経て、１９９９年工学院大学建築都市デザイン学科助教授（建築史・建築保存修復学）、建築学部建築デザイン学科教授、２０００年　ＲＡＣ理事に就任、２０１７年　工学院大学理事長に就任

２０１５年　シルクロード・ネットワーク設立

委員等：NPO 法人　木の建築フォーラム理事／稲荷山地区伝統的建造物群保存対策調査委員会委員他

著作等：『建物の見方・しらべ方　江戸時代の寺院と神社』（共著）『建築学の基礎６　日本建築史』、『都市の記憶を失う前に』、『それでも「木密」に住み続けたい』等、多数

東日本大震災の復興に対しては、石巻市での『東北に美しい村を復興する Project』に携わる。

□米山　淳一（よねやま　じゅんいち）　公益社団法人横浜歴史資産調査会常務理事、RAC 理事

１９５１年　神奈川県横須賀市生まれ

１９７４年　獨協大学外国語学部 英語学科卒業、財団法人日本ナショナルトラストに入所、事業局長を経て退所

２００９年　公益社団法人横浜歴史資産調査会常務理事・事務局長に就任、２０１４年　ＲＡＣ理事就任

２０１５年　シルクロード・ネットワーク設立

現在、獨協大学オープンカレッジ講師・日本鉄道保存協会顧問他

著作等：『地域資産　みんなと奮闘記』、『歴史鉄道　酔余の町並み』ほか

□星　和彦（ほし　かずひこ）　NPO 法人　街・建築・文化再生集団（RAC）理事長・前橋工科大学名誉教授

１９５１年　東京、駅舎の有名な国立生まれ

１９７５年　東京都立大学卒業、東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程単位取得満期退学

１９９４年　前橋市立工業短期大学助教授（建築史・建築文化資源学）に奉職、前橋工科大学助教授、教授を経て、２０１５年前橋工科大学々長に就任、２０２２年退官、現在に至る

１９９９年　NPO 法人 街・建築・文化再生集団設立、理事長

２０１５年　シルクロード・ネットワーク設立

委員等：日本建築学会関東支部建築歴史／意匠専門研究委員会委員、英国建築史、西洋建築史（英国建築史）専攻

横浜山手の歴史を生かしたまちづくり

米山　淳一（公益社団法人横浜歴史資産調査会 常務理事）

幕末の安政５年の日米修好通商条約締結を機に翌年、横浜、神戸、長崎、新潟が開港しました。函館は、先の日米和親条約で開港していましたからこれで５つの町が揃って海外に向けて港を開きました。この史実を大切に開港５都市景観会議が毎年されています。発案は、神戸市でした。２０２３年度は函館市で開催され、２０２４年度は横浜市です。この会議や旅行を通じて開港５都市を訪ねますと町の雰囲気がよく似ていることに気づきます。特に横浜と神戸は絹貿易で繁栄したこともあり、一層強く感じます。あれこれ考えてみますと歴史的資産がまちづくりに生かされているという共通点に行き着きます。

横浜は、昭和６３年から歴史を生かしたまちづくり要綱を基に横浜らしい景観保全を推進してきました。居留地の関内や山手地区を始め、鎌倉文化が息づく金沢地区、里山や田園が拡がる郊外地区など広範囲に歴史的資産を登録、認定物件とする形で景観保全を行ってきました。その根底を支えるアーバンデザインは開始から５０年、歴史を生かしたまちづくりは３５年を迎えました。その成果は横浜らしい景観形成を促進し、指針としていた「明るく楽しく歩ける街」に近づきつつあります。

残念なのは、西洋館が残る山手地区が未だに重要伝統的建造物群保存地区に選定されないことです。昭和５９年、６０年に文化庁の補助で保存対策調査が実施されましたが、保存地区に向けた住民の皆さんの関心が薄く、前には進みません。その陰には、都市デザイン室が推進していた歴史を生かしたまちづくりがあり、登録、認定制度で西洋館群を保全する動きが強かったのです。現在、横浜市が７軒の西洋館を取得保存し、指定管理者の緑の協会が公開管理し好評です。個人の住居として西洋館が息づいておりますが危機に瀕する西洋館もあります。幸い１３３番館は、見識ある実業家が取得され、解体を免れました。神戸市北野、長崎市東山手、南山手、函館市末広元町が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、羨ましい限りです。

平成２３年、２５年に当公益社団では、山手西洋館の現況調査（文化庁補助）を行いました。さらに５年前には、先進地である神戸市、長崎市、函館市の選定当時の重伝建地区担当者を横浜にお招きし、講演会、シンポジュームを開催しました。その時は、横浜山手もと燃え上がりましたが、「重伝建は観光だ」、「山手の住人は保存を望んでない」など様々な方々からの声が大きくなりました。その上、横浜市文化財担当や都市デザイン室も関心を示さず、重伝建熱は冷めてしまいました。それでも当公益社団は、山手東西町内会や関係団体などとのお話し合いを細々と続けております。

写真 1．馬車道

写真 2．111 番館（ラフィン邸）

写真 3．234 番館

写真 4．居留地敷地境界石

この項、写真撮影は全て米山

今年度からは、都市デザイン室が歴まち事業の認定に向けた動きを活発化させています。いずれにしても横浜山手の歴史を生かしたまちづくりは、新たな展開を迎える時期に来ていると感じています。

横浜の繁栄を支えた生糸貿易

西川　武臣（横浜開港資料館館長）

１、　横浜開港と貿易の開始

横浜は１８５９（安政６）年７月１日に開港したが、貿易の本格的な開始は生糸の輸出から始まった。生糸輸出が急増したのは同年９月頃からで、この頃から生糸貿易商たちが大量の生糸を外国商館に販売している。その後、蚕種（蚕の卵）や茶の輸出も始まり、１８６７（慶応３）年段階では、生糸が全輸出品価額の約５０％、蚕種が約２０％、茶が約１５％を占めるに至った。当時、ヨーロッパでは蚕の病気が流行し、生糸の生産がストップしていたため、フランスを始めとするヨーロッパの織物業者はこぞって良質な日本の生糸を求めることになった。

２、　横浜での生糸取引

横浜では日本の生糸貿易商が外国商館に生糸を持ち込んだが、その際、外国商館の商人は生糸貿易商の店で仮契約を結び、見本の生糸を自分の店に持ち帰った。その後、生糸貿易商は外国商館に見本の生糸と同質の生糸を持ち込み、外国商館の店で本契約が結ばれた。その際、本契約が結ばれるまでの間に、外国商館にとって不利な形で生糸相場が変動した場合、外国商館が見本の生糸と品質が違うなどの注文を付け本契約が破棄されることもあった。こうした日本側に不利な取引形態が長く続いた。一方、外国商館に持ち込まれた生糸は、大さん橋が完成する１８９０年代後半までは「象の鼻」と呼ばれた波止場から小船に積まれ沖合に停泊する外国の貨物船に積み替えられた。また、その多くはロンドンを経由してヨーロッパに送られた。また、大さん橋や新港ふ頭などが完成すると大型船が港に直接着岸するようになった。さらに、この頃からアメリカで絹織物業が勃興するようになり、日本の生糸はアメリカに多く送られるようになった。

３、　古き横浜の崩壊―関東大震災で失ったもの

１９２３（大正１２）年９月１日、関東大震災が関東地方南部を襲った。当時の横浜市では死者２万３０００人、負傷者４万２０００人、行方不明者３０００人を出した。この時、神奈川県庁や横浜市役所は地震直後に発生した火災によって焼失したが、役所が持っていた多くの行政文書を焼いてしまった。そのため、横浜市では震災前に作成された戸籍や土地台帳などを失い、それ以前に住んでいた人のことを調べることができなくなった。また、本町通りや弁天通りにあった日本人の貿易商人の店、現在の山下町や山手町にあった外国人の店もすべてが倒壊した。そのため、それ以前の生糸貿易の具体的な様相を調べることができなくなった。さらに、当時、耐震構造を備えた建物が少なかったため、当時の町並みも崩壊してしまった。横浜は関東大震災によって「記憶を失った街」になってしまった。

４、　講座で紹介する絵や写真について（いずれも横浜開港資料館所蔵）

①　生糸貿易商石川屋（現在、横浜市開港記念会館の建っている場所にあった店）の店頭での生糸取引の様子（幕末に描かれたもの）

② 明治初年の「象の鼻」を描いた浮世絵

③ 大さん橋

④ 幕末から明治時代にかけて大量の生糸を扱ったスイス系商社シイベル・ブレンワルド商会（現在の山下町９０番地）

⑤ 渋沢栄一の従兄であった渋沢喜作が経営した渋沢商店、この店は原三溪が経営した原商店と並んで多くの生糸を扱った。

FA150-002 渋澤商店

⑥ 関東大震災直後の常盤町

シルク博物館について

高橋　典子（シルク博物館副館長）

■英一番館跡地の「シルクセンター」

シルク博物館は、横浜市中区山下町１番地に建つシルクセンター国際貿易観光会館（以後、シルクセンターと記述）の２、３階部分に設置されている。

シルクセンターは 1959（昭和 34）年 3 月、横浜開港 100 年記念事業として神奈川県、横浜市及び関係業界の協力により、貿易・観光の振興、とくに生糸及び絹製品貿易の振興発展を目的として建設され、そのための活動拠点としてシルク博物館が設立された。シルクセンターは、横浜港大さん橋や山下公園、横浜中華街にもほど近く、みなとみらい線日本大通り駅から徒歩 3 分という好立地にある。ここは、1859（安政 6）年の横浜開港とともに整備された外国人居留地の１番地で、イギリスの商社ジャーディン・マセソン商会（通称：英一番館）があった由緒ある場所でもある。ちなみに建物の設計者は日本のモダニズム建築の先駆者として著名な坂倉準三（1901-1969）で、低層階と高層階にわかれた特徴的な構造の建物となっている。なお、開館当初は高層階がシルクホテル（1982 年閉鎖）、低層階の 4 階部分には横浜生糸取引所（2006 年東京穀物商品取引所との合併により解散）があった。

写真 1.　シルクセンタービル

■シルク博物館の展示・普及事業

当館は、1959（昭和 34）年の開館以来、日本の近代化を牽引してきた蚕糸業の歴史と絹の科学・技術への理解を深めるとともに、主要なシルク製品の産地の紹介、貴重な絹服飾の工芸美の鑑賞の場を提供することを目的として活動してきた。博物館の展示室は上下２階に分かれており、エントランスから続く下の階では、絹を生み出す蚕の生態から始まって、養蚕、製糸、染織の技術に関する展示のほか、蚕糸業と横浜の歴史、新たな技術開発によって生み出されたシルク製品などを紹介している。上階展示室では、古代から現代に至るまでの日本の服飾の移り変わりを見ることができるほか、アジアを中心とした世界の民族衣装、人間国宝作家の着物など、優れた絹の工芸品の数々が展示されている。

写真 2．3．シルク博物館展示室

展示事業ではさらに年２回、春期に収蔵品を中心とした企画展、秋期に特別展を開催している。秋の特別展として隔年で開催している「全国染織作品展」は、絹を用いた染織工芸品の公募展で、新進作家の育成と染織技術の向上、絹の需要促進に寄与することを目的とし、これまでに 27 回実施してきた。

また、博物館活動の大きな柱として教育普及事業に力を注いでおり、学校教育との連携事業、真綿や紬糸の伝統技術を紹介する実演・講習会、染織講座や子ども向けワークショップなどを開催している。特に、蚕の飼育を軸として「チャレンジ！かいこプログラム」と名付けた事業を、一年間通して展開しており、5 月に学校を対象とした蚕の卵（蚕種）の頒布と教員対象の蚕の飼育講座を実施し、夏休み期間中は集中的に子ども向けワークショップを開催、冬季には自由研究の成果や繭クラフトなどの作品発表の場を提供している。

■シルク博物館のコレクション

シルク博物館の活動の根幹となっているのが、収蔵品（コレクション）の数々である。当館では、幅広い分野にわたっ

てシルク製品とその関連資料を収集保存し、様々な角度から公開・活用に努めてきた。現在（2024 年 2 月末）の収蔵資料点数はおよそ 6900 点にのぼる。その 9 割近くを絹の染織工芸品が占めており、江戸時代の小袖や人間国宝作家による着物など貴重な作品が数多く含まれている。また、横浜とシルクの歴史を今に伝える資料の収集にも努め、近世から昭和初期にかけての養蚕技術書や文献資料、蚕織錦絵、生糸貿易に関わる資料、養蚕・製糸業に関する資料なども収集してきた。ここでは、当館の貴重なコレクションのなかからいくつかご紹介したい。

【小袖】

小袖は、今日の「きもの」の原形とされるもので、袖口が小さく縫いつまっていることからこう呼ばれる。平安時代に、いわゆる十二単の下着や庶民の衣服として用いられていたものが、時代を経て変化し、江戸時代に至って基本的な服装の形として完成した。シルク博物館では、開館当時から収集してきた小袖 65 領を所蔵している。これらは、現在では新たに収集することができない貴重な品であり、当館の中核をなすコレクションとなっている。

写真 4．左：「振袖　浅葱縮緬地桜滝に鼓模様染繍」
江戸後期

写真 5．右：「小袖　紫羽二重地藤芙蓉に蝶模様染繍」
江戸後期

【蚕織錦絵】

養蚕から製糸、機織りまでをテーマとした多色刷りの浮世絵を「蚕織錦絵」といい、江戸時代後期から明治 20 年代という長きにわたって多種多様な作品が制作された。当館所蔵の蚕織錦絵はおよそ 220 点、絵師は 50 人以上にのぼる。そのなかには「東海道五拾三次」で有名な初代安藤広重、独特な美人画を得意とした渓斎英泉、奇想天外な錦絵で人気を博した歌川国芳、横浜絵の第一人者と呼ばれた歌川貞秀なども見られる。これら蚕織錦絵からは、養蚕が隆盛をきわめた往時の風俗や世相などを読み取ることができる。

写真 6．貞秀「蚕家織婦之図」　三枚続　江戸時代

【生糸商標】

1859 年の横浜開港から昭和初期まで、生糸は日本の輸出品第一位を占めていた。生糸商標は、各製糸会社が輸出する生糸につけたラベルで、チョップ、チップとも呼ばれた。製糸会社は自社ブランドの生糸の識別と品質保証、宣伝などを目的として意匠を凝らした商標を作った。それぞれのデザインを見てみると、製糸場の外観、蚕や繭のほか、さまざまな動植物、神仏、富士山や鎧兜、日本的な絵柄のものなどバラエティに富んでいる。特に明治期の商標には、石版や銅版の高度な印刷技術が用いられた美しいものが多く見ごたえがある。大きさも、明治中期頃までは写真キャビネ判ほどもあったが、時代が下ると小型で厚手の形状に変わっていった。

写真 7．碓氷社（群馬県）湘南社（神奈川県）矢島機械製糸（長野県）廣瀬米倉製絲所（埼玉県）清水製糸（栃木県）

シルク博物館では、今後も収蔵品の充実に努めるとともに、世界でも数少ない絹専門の博物館として幅広い層に絹の魅力やすばらしさを発信していく所存である。横浜に来たらぜひシルク博物館にお立ち寄りいただきたい。

田島家移築のあゆみ

三島　敏樹（旧田島家養蚕展示館館長）

旧田島家主屋は、現在地（世界遺産登録エリア）から北東方向へ数キロ程離れた戸ケ野集落に、明治 10 年頃に建てられたと伝わっている。創建当時は、間口 6 間半、奥行き 3 間半の合掌造りで、白川村の合掌造り民家としては，標準的な規模であった。

解体が予定されていた田島家は平成 5 年、白川村の事業で現在の位置に移築が計画され、同年 9 月に着工、翌平成 6 年 2 月に工事が完了した。工期は 6 ヶ月、延べ 386 人が関わった。

創建以来、田島家には部分的な改造が施されていたが、移築にあたり、創建当時の田島家主屋復元が目的とされた。その移築工事の過程は「白川郷の合掌民家・技術伝承の記録」として映像化され残されている。

田島家移築後、「技術伝承の館」として施設運用されていたが、数年で閉館され空き家になっていたところ、平成 27 年 4 月 20 日「田島家養蚕展示館」として屋内内部を改装し、運営されることとなり、現在に至っている。

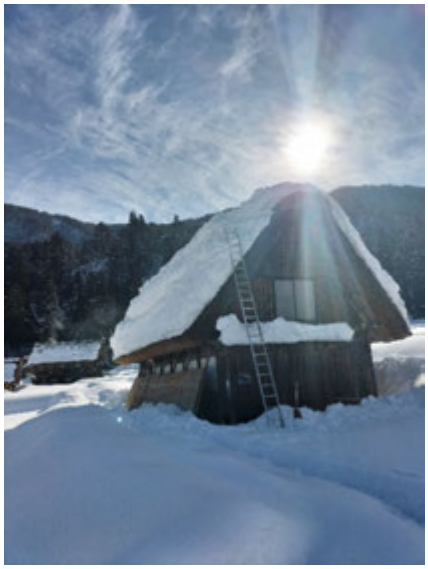


図 1．1 月の旧田島家

白川村の養蚕

記録にあるには、江戸時代より養蚕業は白川村の人々の生活を支えた基盤産業であり、飛騨地方でも屈指の盛況を極めていた。その勢いは明治期以降にも引き継がれ、ことに生糸が外国貿易の花形輸出品となる二十年から三十年代にかけて、本村の養蚕業はピークに達するようになる。

明治初期の資料によると、当時の本村の繭の生産量は、年間４０００～５０００貫
(１５０００～１８９５０㎏)を記録している。これらの繭のうち屑繭などを除いた大部分は自家で糸にひき、生糸として売り出していた。その量は，４００～５００貫（１５００～
１８９５㎏)、しかも良質の生糸として市場で好評であった。

図 2．秋の旧田島家

「本村の手びき絹糸は白川糸と云って有名であった。田島糸とも称し越中方面や京都に売り出された。西陣織のためには非常に喜ばれ御用糸にもなった」と旧『白川村史』に記載されている。

「例年相用来候糸堅横井附等之覚」という文久九年の記録によると、生糸の品質等級において、飛騨白川糸として最高位にランクされていたほどである。

養蚕は合掌造り民家の二階で行われていた。

図 3．旧田島家の桁行の景観

山形県新庄市　旧農林省蚕糸試験場新庄支場（新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」）

加藤　明（新庄市商工観光課クールジャパン新庄推進室長）

■開園時間　午前 9 時～午後 5 時

■入園料　　無料

■休園日　　火曜日、年末年始

■施設情報　〒996-0091　新庄市十日町 6000-1

電話 0233-29-2122　Mail　ecology-g@ic-net.or.jp

旧農林省蚕糸試験場新庄支場は、昭和 9 年に「蚕業試験場福島支場新庄出張所」として発足。施設の建設が進められて昭和 11 年より事業を開始しました。その後、昭和 12 年に「蚕糸試験場新庄支場」、昭和 33 年に「蚕糸試験場新庄原蚕種製造所」、昭和 43 年に「蚕糸試験場新庄原蚕種試験所」と改称を重ね蚕種の研究や桑の栽培等、戦中から戦後にかけて一貫して蚕糸業の発展に寄与してきました。

この施設は、国の行政改革により昭和 58 年 5 月、「蚕糸試験場蚕育部原蚕種第一研究室及び農業生物資源研究所遺伝資源部保存法第二研究室」に改組され、幾度の組織改変の後、「東北農業試験場畑地利用部畑作物栽培生理研究室」を最後の名称として平成 12 年 3 月に閉所されました。その後、平成 14 年 2 月、新庄市に譲渡され、同年 8 月から「新庄市エコロジーガーデン」として蚕糸研究の歴史を紹介するとともに、自然環境を学び、交流の場を提供する施設として活用してきました。平成 25 年 3 月には、庁舎や蚕室、廊下等を含めた建造物 10 件が登録有形文化財として登録されました。

▲耐震改修後の旧第 4 蚕室

▲おやさいカフェ・アオムシ

▲多くの人で賑わうマルシェ

その後、「旧農林省蚕糸試験場新庄支場保存活用計画」を策定し、計画に基づき平成 30 年から令和 3 年までの 4 年間で、蚕室 3 棟の耐震改修工事を実施しました。平成 30 年にリニューアルオープンした旧第 5 蚕室では、産直施設が営業を再開し、令和 2 年には旧第 4 蚕室にカフェ・レストランやギャラリー、オフィスなどが開業、令和 3 年には旧第 1 蚕室をホールやギャラリーの貸館を行う「文化交流施設」としてリニューアルオープンしました。

開園から 20 周年を迎えた令和 4 年、エコロジーガーデンの更なる利活用に向けて国と一体型の道の駅整備の事業化が決定し、同年 10 月に国と基本協定を締結し、令和 7 年度の開業に向けて施設整備を進めています。この道の駅整備事業では、新たに駐車場とトイレ休憩施設を整備し、既存の歴史的建造物群を地域連携施設として活用することとしており、登録文化財建造物を活用した全国的にも珍しい特色のある道の駅として期待されています。

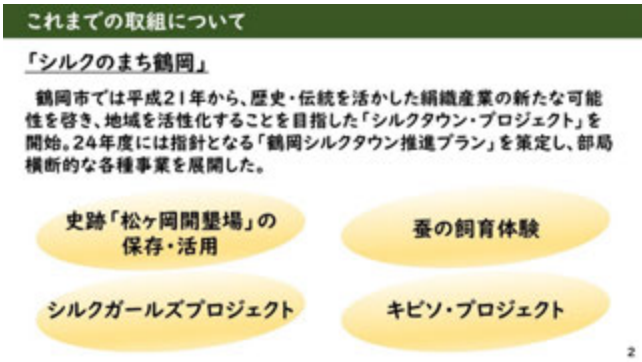
■新庄の絹織物「新庄亀綾織」

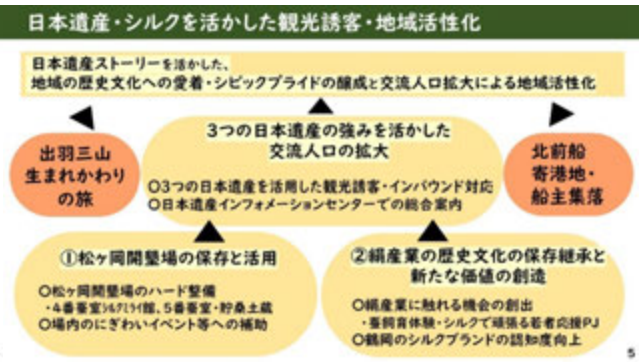
新庄の伝統の絹織物「新庄亀綾織（かめあやおり）」。新庄藩 9 代藩主戸沢正胤（まさつぐ）が文政 13 年（1830）に技術者を招き、藩の特産品として奨励したのが始まりです。

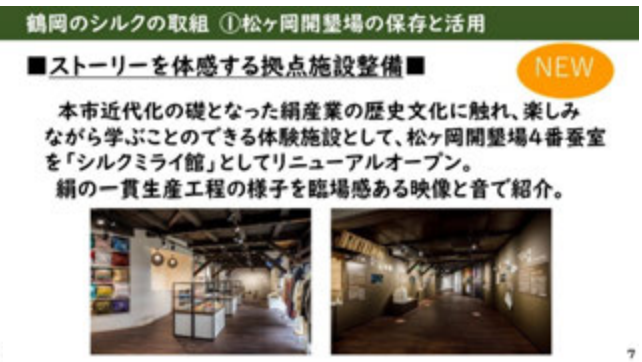
明治末期に生産が途絶え”幻の織物”と呼ばれていましたが、昭和 60 年に新庄亀綾織伝承協会が発足し「紗綾形」「八つ橋織」などの復元に成功。その後も織の復元と伝承活動を続け、現在では 20 種類以上の折り目模様があり、織り上げてから染色するため、しっとりした風合いと光沢が特徴で気品のある色が美しい織物です。

未来へ紡ぐサムライゆかりのシルク

佐藤　直翔（鶴岡市企画部政策企画課）







鶴岡のシルクの取組 ①松ヶ岡開墾場の保存と活用

■四季のにぎわいイベント■

・桜まつり(4/16・17) …延べ4,000名
・音楽祭・食市(9/17) …延べ400名
・夏祭り・桃市(8/5) …2,500名
・クラフトフェス(9/30・10/1) …延べ5,000名
・雪まつり(1/27) …500名

松ヶ岡桜まつり

松ヶ岡音楽祭(JAZZ)

松ヶ岡クラフトフェス

松ヶ岡雪まつり

8

鶴岡のシルクの取組 ②歴史文化の保存継承と新たな価値の創造

■蚕の飼育体験■

松ヶ岡開墾場内の「おカイコさまの蔵」を拠点に、幼稚園・保育園、小・中学校等に「蚕の飼育キット」を配布。協力いただいた市民を「繭人」として認定し、蚕や鶴岡の絹の歴史に触れ、学ぶ機会を創出し、養蚕や絹に対する関心を高めた。

【R5実績】
・保育園・幼稚園・学校等
52施設・6個人(約3,500頭)
・松ヶ岡開墾場の展示飼育
(春3,000頭、秋7,500頭)

9

鶴岡のシルクの取組 ②歴史文化の保存継承と新たな価値の創造

■シルクガールズプロジェクト■

県立鶴岡中央高校の生徒が、制作したシルクドレス等を披露するファッションショーを毎年開催。

企画・運営も自分たちで行い、蚕の飼育体験を行った子ども達からモデルになったもらうなど、幅広い世代に鶴岡のシルクに親しんでもらう取り組みを行っている。

蚕室を会場にした
「シルクガールズコレクション」

10

鶴岡のシルクの取組 ②歴史文化の保存継承と新たな価値の創造

■シルクで頑張る若者応援プロジェクト■ NEW

シルクをテーマにした高校生等が取り組む探究活動に支援。生徒の柔軟な発想から、シルクの科学的な研究や出前授業、ファッションショー等を実施している。

①総合学習・研究活動
②普及啓発活動
③魅力発信・PR活動

11

鶴岡のシルクの取組 ②歴史文化の保存継承と新たな価値の創造

■キビソ・プロジェクト■

蚕が繭を作るときに最初に吐き出す糸「キビソ」。
独特のゴワゴワした素材感や風合いと、精鋭デザイナーの新新なデザインを融合させることで、鶴岡のシルクのブランド化を進めた。他産地と連携したコラボ商品の開発や海外展開も行った。

12

鶴岡のシルクの取組 ②歴史文化の保存継承と新たな価値の創造

■新ブランド「MAKINU」■ NEW

令和5年4月、鶴岡シルクの新ブランド「MAKINU」が発表。肌に触れた時のやさしさを重視し、特殊な製法、糸の撚り方を用い、空気をより多く含むように生み出された生地を採用している。

3種×2色のスカーフを展開

13

地元組織・民間との協同

■松ヶ岡の施設運営■

松ヶ岡開墾場の管理・運営を地元組織が担い、場内の案内やHP・SNSでの情報発信を行っている。

HP↑ インスタグラム→

■民間のワイナリー施設■

松ヶ岡開墾場隣地にワイナリー「ビノ・コッリーナ」がオープン。
県内外からの来訪者が周遊することができる。

14

養蚕の隆盛をいまに伝える「上条集落」

飯島　泉（甲州市会計課長）

１．はじめに

甲州市は平成 17 年（2005）に旧塩山市、旧勝沼町、旧大和村の合併により誕生した。市域の 81%を森林が占めており、周囲の山々を源とする中小の河川が形成した扇状地に集落と畑地が作られている。重要伝統的建造物群保存地区に選定されている「甲州市塩山下小田原上条」（以下、「上条集落」と呼ぶ。）は、青梅街道に沿って流れる重川に注ぐ支流が作った南面傾斜の小さな扇状地に展開する、戸数 20 数戸の小さな山村集落である。

写真 1.　上条集落遠景

２．茅葺切妻造主屋

JR 塩山駅の北に所在する重要文化財旧高野家住宅は 19 世紀初頭の建築と思われ、峡東地域（甲州市・山梨市・笛吹市）の近世養蚕民家を代表するものである。その特徴は、茅葺（現銅板葺）、切妻造、三階建で、大屋根の中央付近に「突き上げ屋根」と呼ぶ櫓をもつ。規模は違えども同様の形態の主屋はよく目にすることができ、平成 14～15 年（2002～2003）に（財）都市農山漁村交流活性化機構が行った茅葺民家実態調査では、塩山市（当時）において 400 棟を超える茅葺主屋が確認された。面白いことに茅葺切妻造主屋は市域にまんべんなく分布していて、密度の濃淡はあるものの新興住宅地以外に空白地域はないという状況であり、養蚕が盛んな地域だった証であるといえる。

写真 2.　重要文化財旧高野家住宅主屋

養蚕民家としての茅葺切妻造主屋という認識であるが、ただ川崎市立日本民家園に移築されている、旧塩山市に所在した旧廣瀬家住宅（17 世紀後期）の様子をみると、養蚕の作業場となる二階が設けられていない、開口部が極めて少ないなど、「養蚕のための茅葺切妻造主屋」という感じはしない。養蚕の発達に伴い増産を図るため、茅葺切妻造という形態を残しながら突き上げ屋根の付加など構造や間取りを変更していった。

３．上条集落(pic.3)

上条集落の概要をパンフレットから転載する。

名称	甲州市塩山下小田原上条伝統的建造物群保存地区
種別	山村・養蚕集落
条例制定年月日	平成 26 年（2014）3 月 24 日
地区決定年月日	平成 27 年（2015）2 月 18 日
重伝建地区選定年月日	平成 27 年（2015）7 月 8 日
地区面積	15.1 ヘクタール
保存物件数	伝統的建造物　64 件 （建築物 26 件、工作物 38 件）

写真 3.　上条集落全景

環境物件　3 件

上条集落は、重川の氾濫源がやや緩やかになる小田原橋から、1 キロメートルほど北上した場所にあります。金剛山と呼ばれる舌状台地が南北方向にはしり、台地北端の付根部分に所在する集会場を兼ねた観音堂を囲むように雛壇状の集落が形成されています。

この金剛山には、観音堂、金井加里神社、真言宗福蔵院があり、宗教施設が集中しています。特異な地形そのものが信仰の対象になっていたようにも思われます。

上条集落の成立については定かではありません。近くの上萩原には 16 世紀に経営されていた黒川金山（国史跡）で金の採掘に当たっていた金山衆の一人・中村弾左衛門尉が居を構えており、伝承では中村弾左衛門尉に結び付けて集落の始まりを説いています。

山梨県の甲府盆地東部に広く分布する茅葺切妻造主屋は、甲州市でもまだ相当数が残されていますが、上条集落のように一つの集落内でまとまって保存されている例は稀です。茅葺切妻造主屋の大きな特徴である「突き上げ屋根」は「煙出し」「明かり取り」とも呼ばれ、明治時代になってから養蚕の振興に伴い付加されたものです。また、増産を図るため養蚕に特化した別棟の蚕室を設け、昭和時代の中頃までに建てられた桟瓦葺越屋根つきの主屋とともに、養蚕が盛んだったころの集落の状況が良く残されています。

養蚕に代わって果樹栽培が盛んになり、桑畑や棚田にはそのままスモモやモモ、ブドウが植えられました。春には満開のスモモの花に埋もれるように伝統的な建築物がみえます。

養蚕が廃れた後も、比較的コンパクトな集落内に伝統的な主屋や蚕室が数多く残され、往時の風景が想像できることは貴重なことです。

上条集落の調査は、（財）日本ナショナルトラストの平成 16 年度（2004）「観光資源保護調査」により実施した。旧高野家など単体の建造物としての情報しかなかった茅葺切妻造主屋であったが、面的に複数の主屋を調査し比較検討を加えるというこの調査は、その後の茅葺切妻造主屋の理解に大きく貢献した。

４．茅葺切妻造主屋の変遷(pic.4)

14 棟の当該主屋を調査し、それぞれの建築年代を特定することで、上条集落内で茅葺切妻造主屋がどのように変遷したかを追うことができた。

写真 4.　上条集落全景

集落でもっとも古い例は 17 世紀後期の痕跡を残している。この主屋は、現状は大きな突き上げ屋根をもち、妻壁に露出する棟持柱と化粧貫とあわせ抜群の美観を呈しており、外観上は 19 世紀の建築にしか見えない。だが調査をしていくと、蛤手斧で仕上げた柱や旧廣瀬家と同じ「四つ建」の構造が現れ、大黒柱も後補と分かった。復元された間取りは川崎市立日本民家園の旧廣瀬家住宅によく似る。養蚕を行うため平屋の建物を二階建に改築するという大技を繰り出した主屋である。

もっとも新しい例は明治 37 年（1904）の建築である。その姿は突き上げ屋根の部分を主屋サイズにしたようなもので、妻側からみる大屋根の形状も三角ではなく「への字」に見える。二階はそれまでの「屋根裏」から「部屋」になり、開口部も突き上げ屋根と比較して倍以上に増えるなど、養蚕作業の利便性は高かったと思われ、茅葺切妻造主屋の最終形態として捉えることができる。

18～19 世紀の茅葺切妻造主屋については、軸組構造の変化を基に 3 段階程度に分けて区分がなされている。養蚕が進んでくると作業場としての二階の活用が求められ、①小屋裏にゆがみの少ない材を使うなど二階を床として使えるようにし、②18 世紀中頃には梁を支える大黒柱が中心に建つようになる。③その後 19 世紀には大黒柱が棟持柱となり、二階、さらに三階（当地では「ワニカイ」と呼ぶ。）の活用が一般化していった。

５．突き上げ屋根の付加

14 棟全ての茅葺切妻造主屋には、突き上げ屋根などにより正面二階に開口部がある。しかし、調査の結果建築当初からあったと認められるのは 2 棟で、12 棟については後で付加されたことが分かった。なお、当初の 2 棟のうち 1 棟は先述の明治 37 年建築のもの、もう 1 棟は明治初頭の建築とみられる。

当地域の茅葺切妻造主屋は本来養蚕には不便な構造で、作業場として使う二階以上は屋根裏となり、暗く風通しの悪い空間である。この欠点を改善するために突き上げ屋根が考案されたのであろうが、江戸時代を通じて突き上げ屋根は名主などに許されるステイタスであり、一般の百姓には認められなかった。その頃の上条集落の生業は畑作がメインで、標高も 700 メートル前後と比較的高いことから、そもそも養蚕に適さない気候であるとされてきた。

明治時代になり養蚕方法の改善がなされ、上条集落だけでなく山梨県下全域で養蚕が盛んになる。突き上げ屋根を付加するのに障害となった身分の上下も問われず、こぞって屋根の改築が進められたと思われる。

写真 5. 付加された突き上げ屋根

写真 6. 建築当初からの突き上げ屋根

６．むすびに

上条集落は歴史的にも最大で 35 戸ほどしかなく、その主な原因は地形による制約と思われるが、同時に集落内での「暗黙の決まり事」があったのではないかと考えている。例えば、地区の中央から南に垂下する「金剛山」という台地には住宅がなく、南端には福蔵院、中心には金井加里神社、北端には観音堂の 3 社寺が所在することから、「聖地」のような認識があったのではないか。

氏神である金井加里神社が集落の手前に鎮座しているため、神社の境内を通り抜けて集落に入るという空間構成は、少なくとも市内の山村集落では例をみない。地形的にも、氏神に見守られているのではなく氏神を見守っているような位置関係がある。

集落は観音堂を囲むように展開している。その観音堂だが、18 世紀の建築とみられるが、堂内には地域出身の木喰僧・木食白道作の「一木百観音立像」（天明元年・1781）が安置されている。規模や間取りから当初から集会場を兼ねていたと思われ、今も集落（組）の会議や行事の際に使われている。つまり、建設以来 300 年ほど地区のコミュニティの中心として位置づけられているということである。

写真 7. 観音堂遠景

写真 8. 観音堂の内部

上条集落では、住民は意識していなくても、人々と神仏が仲良く共存していた頃の様子がよく残され、それが現在の上条集落の特性の土台となっている。

【追記・甲斐国での養蚕】

『正倉院文書』の「天平宝字 4 年（760）」の断簡に、甲斐国に「絁（あしぎぬ）」を注文していることが記されている。また、10 世紀前半にかけて施行された『延喜式』では甲斐国の調（税としての産物）に「絁」を挙げている。「絁」は粗悪な蚕糸で粗く織った平織の絹布のことで、古くから甲斐国で絹布の生産が行われていたことが分かる。この段階で、当然養蚕も行われていたのだろう。10 世紀後半になると品質の向上が図られたようで、以後、甲斐国から国へ納められる産物は「絁」から「絹」に代わる。

甲州市内において平成 27～28 年（2015～2016）に発掘調査されたケカチ遺跡の平安時代住居跡から、「われにより　おもひくく（る）らん　しけいとの　あはすやみなは　ふくるはかりそ」と刻書された土師皿が出土した。この土師皿は「甲斐型」と呼ばれている高品質のもので、編年から 10 世紀後半の作とされる。刻書された 31 字は「我により　思い繰らむ　絓糸の　逢わずやみなば　更くるばかりぞ」という和歌であると判明した。

この中で詠まれている「絓糸（しけいと）」とは質の悪い絹糸のことで、切れやすいことから「男女の仲」を比喩するものとして和歌に登場する。また、甲斐国から調として国に納めていた「絁」の材料でもある。甲斐型土器も絹織物も甲斐国の重要な産物であったため、甲斐国府が主導するなか生産されたものと考えられている。

≪参考文献≫

『平成 16 年度観光資源保護調査　上条集落の切妻民家群』
財団法人日本ナショナルトラスト　2005 年 3 月
『古代史しんぽじうむ　「和歌刻書土器の発見」ケカチ遺跡と於曽郷』
甲州市・甲州市教育委員会　平成 29 年 9 月

信州から横浜港へ、そして世界へ－シルクロードを駆ける－

矢島　宏雄（シルクロード・ネットワーク協議会）

千曲市は、長野県北部を流れる千曲川沿いに位置し、善光寺のある長野市と上田城のある上田市の間にあり、古代から交通の要衝の地として文化や物資が行き交っていたところである。平成 15 年(2003)に旧更埴市・戸倉町・上山田町が合併し千曲市となった。蚕糸業が盛んな頃は、千曲川左岸の更級郡と右岸の埴科郡下の村で構成された地域である。信州の山村を出て、横浜港からイタリアへ蚕種を売りに渡航した大谷幸蔵に関する顕彰記念図書[1]や手紙・日誌などの資料[2]、生糸商標[3]などをとおして信州からのシルクロードを紹介したい。

1　横浜港からイタリアへ 4 回渡航した蚕種商人　大谷幸蔵

「大谷幸蔵　サムライ商人」と、『鶴岡フォーラム 2018』[4]で紹介した、松代藩士から蚕種貿易商人となった大谷幸蔵は、文政 8 年(1825)松代藩羽尾村（現千曲市）に生まれた。慶応元年(1865)に産物会所の取締役から松代藩士に、明治 2 年(1869)には松代商法社頭取になり、翌明治 3 年(1870)にイタリアへ蚕種を売りに渡航したサムライ商人である。

往路　明治 3 年 11 月 4 日、横浜港からフランス船タイナス号で、蚕種を携えて通訳の中山譲次（後に外務次官）、横浜に来日していたイタリアの商人ファルファラを案内人に、手代の小松伊作と大谷幸蔵の 4 名でイタリアに向かった。

11/12 香港着－14 日出発、11/18 サイゴン着－19 日出発、11/21 シンガポール着－22 日出発、11/27 コロンボ着－29 日出発、12/6 アデン着－8 日出発、12/13 スエズ運河を通り、12/14 ポートサイド着－15 日出発、12/22 マルセイユ着下船。

航海中に、乗船していたパリに向かう伊藤博文を「長州」、大谷を「信州」と呼び合う親しい関係となる。伊藤と別れた大谷らは、翌 23 日汽車で出発、12/25 ニース着、12/26 ミラノ到着。横浜港を出発して 51 日目である。

イタリアに着いたが、蚕種が思うように売れないことから、大谷は温室を借りて蚕種の一部を催青し、1/9 掃立て、2/12 上蔟させて収繭した繭を見本に新聞広告を出し、イタリア全土で蚕種 25,000 枚を売りさばいた。

2/24 にミラノに戻り、3/1 にイタリアの実業家ブランビーラと会見した。その時の写真が残されており、観ると大谷は丁髷に羽織袴姿である。

復路　案内人のファルファラはイタリアに残り、3 名でイギリス・アメリカの蚕糸業の視察を行うために、先ずロンドンに向かった。3/6 ミラノ出発、スイス・フランスを経て 3/14 ロンドン着、製糸家を訪問視察する。3/20 ロンドン出発、4/4 ニューヨーク着－6 日汽車で出発、4/8 シカゴ着、4/13 サンフランシスコ到着、数日滞在して視察の予定だったが、船便の都合で 4/14 に日本に向けて出発することになる。5/8 アメリカ船で横浜港に帰国し、家人や原善三郎らの出迎えを受ける。世界の蚕糸業を視察した 186 日間の大航海であった。

大谷は、この明治 3 年(1870)第 1 回イタリア渡航後、明治 10 年(1877)、明治 11 年(1878)、明治 13 年(1880)と、明治時代前半期に 4 回イタリアに渡航して蚕種を販売している。横浜では、南仲通 5 丁目 89 番地（現神奈川県立歴史博物館付近）に居を構えていたことが、明治 15 年 10 月 27 日付消印のある農商務省安田定則からの手紙の封書から知られる。

信州人の大谷幸蔵は、幕末から明治の動乱期に、日本の近代化を蚕種貿易で支えた、まさにシルクロードを駆け回ったサムライ商人であった。

前列右より「ファルファラ」氏「ブランビーラ」氏大谷幸蔵氏。後列三井商店手代「ファルファラ」氏実兄「ウヒトリヨ」通訳中山譲次氏支配人「モッター」氏

明治四年三月一日イタリアミラノにおいて撮影したるものにて大谷幸蔵氏帰朝の上これをかしこくも、明治天皇陛下の天覧に供え奉りたるものなり。

『蚕界偉人大谷幸蔵』口絵写真

農商務省からの封書

２　生糸商標からみるシルクロード

生糸商標については、前回の『神戸フォーラム 2022』[5]で“信州シルクロード連携協議会”において、長野県内の生糸商標の中から 32 点を「生糸商標カード」（63×83 ㎜）として印刷して、カードに掲載された製糸場があった市町村役場や観光案内所など 30 か所で無料配布し、観光振興に活用されていることが紹介されている。

千曲市関係の生糸商標カードには、埴科郡埴生村（現千曲市鋳物師屋）にあった有明社と、埴科郡雨宮県村（現千曲市雨宮）にあった生仁社の二枚の生糸商標が使われており、横浜にあるシルク博物館に所蔵されているものである。そのほかのカードの生糸商標の所蔵を見ると、長野県立歴史館 18 点、須坂市立博物館 4 点、駒ヶ根シルクミュージアム 4 点、絹の文化　蚕都常田館 2 点、岡谷生糸博物館 2 点である。

実物を観たいと千曲市にある長野県立歴史館で所蔵生糸商標を閲覧したところ、県内 123 点（県外 414 点）の中には千曲市内の製糸場の生糸商標はなかった。そこでシルク博物館に問合せたところ、更級郡・埴科郡の生糸商標では、7 点所蔵されていることがわかった。今回その中から、千曲市域の代表的な製糸場の生糸商標の写真を掲載させていただいた。

写真の 2 点は、更級郡稲荷山町（現千曲市稲荷山）にあった塚田器械製絲と、埴科郡の有明社のものである。この小さな生糸商標は、千曲市域の生糸が横浜港から海を越え、ヨーロッパやアメリカに輸出されたことを物語るものである。

今ではなくなってしまった製糸場については、『長野県史』[6]や『更埴市史』[7]などから、千曲市域の製糸場は大小 29 軒が数えられた。実際には、それ以上の製糸場があり統廃合が繰り返されたものとみられる。

蒸気機関による器械製糸は、明治 7 年(1874)に埴科郡西条村（現長野市松代町西条）に、富岡製糸場で器械製糸の技術を習得した女工横田英らを迎えて六工社が操業したのがはじまりである。千曲市域では、明治 12 年(1879)に有明社が蒸気機関による器械製糸場を開業した。座繰製糸から器械製糸の導入などにより、更級・埴科両郡での生糸生産量は明治 11 年に約 10 貫であったが、翌 12 年には約 10,000 貫と驚異的に増大している。

写真の米国送荷計算書は、明治 27 年(1894)10 月 30 日に横浜港からペルー号でアメリカへ、有明社の生糸を輸出した時のもので、横浜生糸合名会社の印がある。写真の生糸商標が付けられて、シルクロードを渡って行ったのであろう。

本紹介にあたり、シルク博物館・長野県立歴史館・千曲市歴史文化財センターの皆様方に、資料の閲覧や写真の利用などで大変お世話になりました、御礼申し上げます。

註

(1)　尾崎隈川『蚕界偉人大谷幸蔵』大谷幸蔵翁偉業顕彰会　1951 年

(2)　(1)の図書はじめ、手紙や日誌などの資料は、千曲市歴史文化財センター所蔵。

(3)　写真の生糸商標は、シルク博物館所蔵。

(4)　矢島宏雄「長野県　千曲市の絹の道　蚕糸業」『鶴岡フォーラム 2018』横浜歴史資産調査会　2018 年

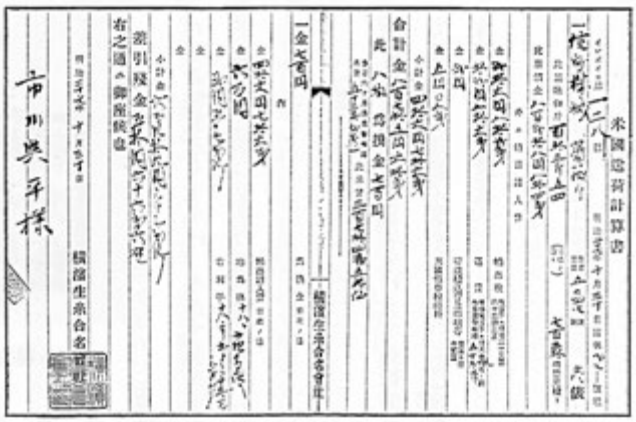
(5)　大西崇弘「糸都・製糸城下町　小諸」『神戸フォーラム 2022』横浜歴史資産調査会　2023 年

(6)　『長野県史』近代史料編第 5 巻蚕糸業　長野県史刊行会　1980 年

(7)　『更埴市史』第 3 巻近・現代編　更埴市史編纂委員会　1991 年、写真の計算書は同書より（市川正憲氏所蔵）。

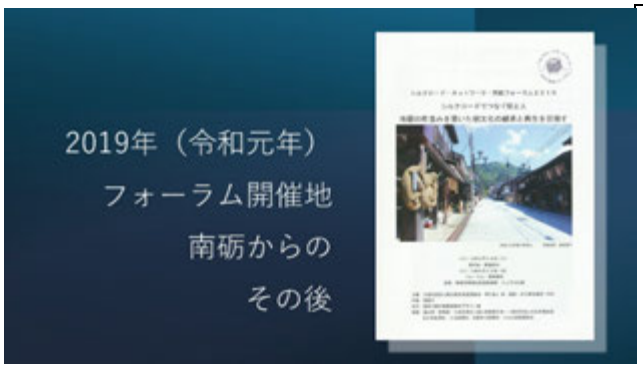
塚田器械製絲(141×107 ㎜)

有明社(151×110 ㎜)


明治 27 年　米国送荷計算書　横浜生糸合名会社印

2019 年（令和元年）フォーラム開催地、南砺からのその後

佐々木　利幸（佐々木寺社建築株式会社）



庄川の豊富な
水流を活用した
木材産業が盛んな地域

繊維産業は
江戸時代以前から盛ん

富山県で

いち早く鉄道開通

昭和９年　宮大工が建築した井波駅舎

2019年　井波八日町通りに購入した一軒家・工事の様子

現在は事務所として活用

2019年　11月号の掲載記事

井波大工の起こり

- ◆明徳元年（1390）本願寺五代門主　綽如上人によって瑞泉寺が開かれる
- ◆文明6年（1474）加賀一向衆が越中瑞泉寺に逃げてくる
- ◆永禄11年（1568）織田信長が越前・加賀を平定
- ◆天正9年（1581）加賀・能登を前田利家、越中を佐々成政に支配させる
- ◆天正9年（1581）北陸の一向一揆の拠点瑞泉寺は佐々成政により破壊、瑞泉寺は井波から城端北野へ退転する
- ◆天正10年（1582）京都本能寺で織田信長が倒れ、天下人の構図が変わり豊臣秀吉となる
- ◆文禄3年（1594）前田利家が佐々成政を追放し、井波瑞泉寺は北野から井波へ戻ることを許される
- ◆文禄3年（1594）前田利家は、尾張時代から前田家に仕えた大工の中から10人を井波に屋敷地を与え、瑞泉寺と井波の復興にあたらせる

大正4年　太子堂立柱式に参列した井波大工衆

1600年代

瑞泉寺 建物の歴史

- ◆慶長元年 （1596）九間四面の仮本堂建築
- ◆慶長10年 （1605）加賀藩の移地により瑞泉寺屋敷地を与え られる
- ◆慶長18年 （1613）屋敷地に仮本堂を移転
- ◆寛永19年 （1642）本格的な瑞泉寺の再建開始
- ◆万治2年 （1659）十四間四面の本堂が完成
- ◆元禄7年 （1694）山門再建

1700年代

- ◆ 元文元年（1736）鐘楼再建
- ◆ 宝暦12年（1762）町屋より出火、瑞泉寺は土蔵を残し焼失
- ◆ 宝暦13年（1763）瑞泉寺再建が始まる、本山お抱え大工の指導により、高度な彫刻を誇り
- ◆ 安永3年（1774）十七間四面の本堂再建
- ◆ 天明5年（1785）山門手斧始め
- ◆ 天明8年（1788）正月、京都東本願寺が焼失。本山大工棟梁八郎らと多くの職人が井波を離れ、京都へ戻る。
- ◆ 寛政3年（1791）鐘楼完成
- ◆ 寛政4年（1792）式台門（勅使門・菊の門）完成

彫刻「獅子の子落とし」は、拝殿地大工棟梁庄屋北村七左衛門による

井波の著名人の歴史

- ◆ 天明3年（1783）越中小羽に洪水暴動生まれる 幼少から大工修行に励む

1800年から1900年初頭

瑞泉寺 建物の歴史

- ◆ 文化6年（1809）山門上棟式
- ◆ 天保13年（1842）太子堂再建開始
- ◆ 弘化4年（1847）太子堂完成
- ◆ 明治12年（1879）9月1日書院屋より出火、山門・式台門を除き、本堂・太子堂等大半を焼失
- ◆ 明治13年（1880）本堂再建開始 棟梁は四代目松井角平
- ◆ 明治18年（1885）本堂完成、遷仏式
- ◆ 明治44年（1911）太子堂起工式 棟梁は五代目松井角平
- ◆ 大正7年（1918）太子堂完成

井波の著名人の歴史

- ◆ 文化元年（1804）洪水暴動21歳、神保組治町に大工棟梁
- ◆ 文化12年（1815）越中井波に藤沢清七生まれる
- ◆ 天保元年（1830）頃？同郷出身の洪水暴動を逃り江戸へ
- ◆ 天保6年（1836）洪水暴動15歳、江戸城西の丸造営に参加
- ◆ 天保9年（1838）安田春次郎 富山藩下級武士（足軽）の子として生まれる
- ◆ 天保9年（1838）藤沢清七24歳、江戸城西の丸造営に洪水暴動とともに参加
- ◆ 天保10年（1839）藤沢清七25歳、仕事の関係と仕事ぶりを見込まれ後援者に
- ◆ 嘉永元年（1848）浅野総一郎 越中西岩田村に生まれる
- ◆ 安政5年（1858）藤沢清七43歳、国策が解かれた直後から開港場建設に参加、横浜支店を任せられる
- ◆ 安政5年（1858）安田春次郎25歳、事会人として江戸に出る
- ◆ 安政6年（1859）藤沢清七44歳、初代義助の死を受け、二代目清水雪助を継ぐ
- ◆ 文久3年（1863）安田春次郎独立、安田商会開業
- ◆ 慶応4年（1868）藤沢清七53歳、築地ホテル館建工（実成第一号）
- ◆ 明治6年（1871）浅野総一郎23歳で上京、本郷で小商売を始める

大正5年頃　工事中の太子堂

出典「井波の近代 写真は語る」井波町ボランティアグループ「夢の郷」サークル編 井波町

各地より　太子堂再建の御用材が運搬される様子

出典「井波の近代 写真は語る」井波町ボランティアグループ「夢の郷」サークル編 井波町

太子堂起工式

出典「井波の近代 写真は語る」井波町ボランティアグループ「夢の郷」サークル編 井波町

再建太子堂の全景

出典「井波の近代 写真は語る」井波町ボランティアグループ「夢の郷」サークル編 井波町

昭和30年頃　太子伝会による街のにぎわい

出典「井波の近代 写真は語る」井波町ボランティアグループ「夢の郷」サークル編 井波町

第 29 回　養父市ふるさと歴史講演会の開催

谷本　進（養父市教育委員会）

養父市は、令和 3 年にグンゼ八鹿工場の跡地に養父市民交流広場を建設しました。そしてグンゼ八鹿工場の本館棟などの一部を保存しています。これは、私たちの家族や八鹿の町がグンゼと共に歩んだ体験が根づいているからであり、グンゼの建物を受け継ぐことが、養父市のまちづくりの継承であると考えています。

この場所で「グンゼと養蚕と絹」をテーマにした講演会を実施することが必要でした。養父市民にとって「グンゼ」という言葉は、大変親しみのある生活に根差した大きな価値をもつ言葉です。

当日は、それぞれの立脚点からお話をいただきました。個性のある多様なお話を提供していただき、興味深くお話をお聞きしました。参加者の方からは、面白かった、良かったという話をいただきました。狭い会場ですが、90 名をこえる方にご来場いただきました。兵庫県下でも、グンゼ、養蚕、絹、などに対する関心の高い地域性を改めて認識する機会となりました。

昨年２月 26 日、神戸市のシルクロード・ネットワーク・神戸フォーラムが、旧神戸生糸検査所が開催され、報告を致しました。そして大きな神戸税関や神戸港をみました。次六様のお話で、「養父市から神戸港への絹の道」が見えてきました。そして、大正 14 年開催の日本絹業博覧会に興味がわきました。

養父市の文化財倉庫を探すと、養父郡町村会（平成 16 年 4 月 1 日に養父市に合併）から引き継いだ資料の中に、日本絹業博覧会の公式記録集がありました。養父郡からの参加記録は記載がありませんでしたが、分厚い冊子をみながら、この博覧会の開催を養父郡（製糸・蚕業・行政の関係者）が支援しただろうと考えました。

この時の思いが、『グンゼ 80 年史』を拝見する中で、大正 12 年 9 月の関東大震災による横浜港の壊滅、それに代わる神戸港から生糸輸出、郡是製糸株式会社の遠藤社長たちの活躍などが分かりました。但馬・丹波・丹後地方の生糸が神戸港から輸出されたことの意味を考えるようになりました。「グンゼから神戸港への絹の道」を考えました。また、高尾様の話をお聞きして、「神戸港からアメリカへの絹の道」が見えてきました。

八鹿工場は、昭和 18 年から昭和 20 年まで川西航空機の紫電改を作っていました。昭和 20 年の姫路空襲で姫路工場が焼けて八鹿工場が姫路工場の疎開工場となりました。このため製糸器械がないので、戦後の織物工場となました。この織物も生糸関係の商品も神戸港から精力的に輸出されました。しかし、化学繊維が普及したことで昭和 40 年中頃には業績が悪化していくようです。

グンゼと八鹿工場と神戸港の結びつきが判明し、大きな成果となりました。養蚕・製糸・絹・神戸港輸出というラインの結びつきが分かってきました。昨年２月のシルクロード・ネットワーク・神戸フォーラムによって旧神戸生糸検査所、神戸税関や神戸港を見て感じる機会をいただいたことが大きな契機となりました。養蚕と神戸港がつながることが具体的に分かってきました。

百草園と生糸商人青木角蔵・三堀武蔵・森田友昇

秦 哲子（日野市ふるさと文化財課（日野市郷土資料館））

１．青木角蔵と百草園

天保８年(1837)、現在の日野市百草に生まれた青木角蔵は、安政の末に開港間もない横浜に出て、慶応元年(1865)2 月からイタリアミラノに本拠を置く蚕種・生糸・屑糸の輸出商社デローロ商会に入り、やがて屑糸を買い集める係の番頭となった。その後、明治 14 年（1881）に独立して、横浜常盤町（中区）に青木商店を構え（その後、弁天町六丁目 107 番に移った）、明治 20 年 4 月には、廃仏毀釈によって衰微した故郷の古刹松連寺跡を「百草園」として開園した。

２．デローロ商会での活躍

デローロ商会はイタリア政府公式使節団よりも先んじて慶応 2 年（1866）以前に日本の絹産地へ赴いたことで知られ、蚕種や生糸に関する豊かな人脈や情報を持ち、そのような中に青木角蔵はいた。旧横浜外国人居留地 91 番地のデローロ商会の切石と赤煉瓦塀は一部残り、横浜市地域登録文化財となっている。

３．百草園にある二つの句碑

百草園開園前後にたてられた二つの句碑には、デローロ商会で角蔵と共に屑糸係番頭を務めた三堀武蔵（俳号：月華）の名が刻まれている。もとは横浜久保山墓地にあり、現在は多磨霊園にある青木角蔵家墓地の一角にも、妻と娘に先立たれた角蔵の深い悲しみを詠んだ月華の句碑がある。

月華の師匠筋には、青木角蔵と同じ多摩地域の福生村出身の俳人森田友昇がいた。友昇は、生糸売込商の草分けである安政 6 年開店の芝屋清五郎店の支配人を務め、維新後は横浜南仲通り三丁目で鰹魚店を開業し、明治 8 年には『横浜地名案内』を刊行した。友昇は百草園開園前の明治 18 年に亡くなっているが、その追善句会を開催したのが月華であった。百草園開園の明治 20 年に友昇が生きていたら、友昇も百草園を訪れ、青木角蔵が見守る中、弟子の月華らとお祝いの吟詠をしたのではなかろうか。

※秦哲子「百草園にある二つの句碑から～青木角蔵・三堀武蔵とデローロ商会」『日野市ふるさと文化財課紀要第 1 号』（令和 5 年 3 月 31 日発行）より

左：青木角蔵、青木商店（横浜弁天通六丁目 107 番地）
下段左：梅の名所、京王百草園
下段中・右：園内にある三堀武蔵（月華）の名が刻まれた二つの句碑。

絹と和紙の町・小川町の動向

平山　友子（NPO 小川町創り文化プロジェクト（まちぶん）理事）

埼玉県小川町は大正時代から裏絹の産地として栄えた歴史を持つ。繁栄をもたらした直接の要因は松本染工場を開いた松本慶三らが緋染めの技術を確立したことによる。それに先立ち、慶三の父の松本嘉三郎は私財を投入して養蚕技術改良に努め、明治 18 年に養蚕改良玉成舎を結成した。この建物はあまたの変遷を経て、現在はレストランなどが入る複合施設として活用されている。小川町の絹の歴史をさらに遡れば、帰化した高麗人がもたらした高麗絹が始まりという説がある。事実であれば 1300 年の歴史を持つことになる。

同様に高麗人によって伝えられたといわれる技術に紙漉きがある。小川町の隣のときがわ町には天武天皇の時代（673 年）に開山した慈光寺という名刹がある。ここで使用される写経用紙の需要があったため紙漉きの技術が発展した可能性がある。時は流れて 2014 年、小川町とその周辺で漉かれる「細川紙」の技術はユネスコの無形文化遺産に登録された。絹産業が斜陽化して久しい小川町においては、和紙の町というキャッチフレーズの方が世に知られている。ちなみに、細川という地名は小川町周辺にはない。江戸時代、紀州の高野山麓の細川村で漉かれていた「細川奉書」が起源といわれる。高品質のこの紙の需要を見越した江戸商人が、近郊で漉ける産地を探したところ、小川町の紙に着目した。今でいう産地偽装である。小川町の紙漉き職人達は、明治維新まで自分達の漉いた紙が細川紙として売られていたことを知らなかったという。

小川町には絹と和紙をつなぐような産業も発達した。蚕卵原紙である。明治時代には全国に発送していた記録が残っている。明治時代に蚕卵原紙の会社が使用していた建物が活用に向けて動き出している。もともとこの建物は明治 17 年に設立された旧比企銀行の社屋だった（建物新築年は不明）。明治 39 年に銀行が移転後、明治 44 年から大正 14 年まで、槻川蚕卵原紙製造合資会社の小川町事務所として使用されたのである。話はそれるが、渋沢栄一が第一国立銀行を開業したのが明治 6 年のことだ。それからわずか 10 余年後に片田舎の小さな町に銀行が創設されたのだから、明治という時代の勢いに感嘆せずにはいられない。もっとも、小川町には同時期にもうひとつの銀行も設立されており、商都として栄えた歴史の一片をうかがえる。この建物を町の地域おこし協力隊の木谷海斗さんが仲間と借り、現在リノベーションの最中である。4 年前、私どもの NPO では、全体に傾いだ上に軒が下がり、瓦が落ちていたこの建物の所有者を説得し、賃貸物件として借り手を募集する許可を得た。それに手を挙げてくれたのが、当時横浜国立大学建築学科の大学院生だった木谷さん達だった。潤沢な資金があるわけはなく、老朽化の著しい建物を自分達でコツコツと直している。まだまだ時間がかかりそうだ。しかし、彼らはきれいに直すことを目的とせず、プロセスを重視しているとのことだ。ワークショップで参加者を募って施工し、工事中でもイベント会場などとして町に開いている。定期的なイベントは地域に根付いてきた。小川町の新しい動きとして見逃せない。

写真 1．20 歳代の若者が活用を考えている旧比企銀行（後の蚕卵原紙会社）

玉成舎といい旧比企銀行といい、町の物語と伝える建物が活用されつつあるのが近年の喜ばしい動向である。これから是非とも取り組まなければならないのが、旧埼玉県立製紙工業試験場の保存活用である。和紙関係者の悲願によって昭和 11 年に新築されたこの建物は、当時の流行を取り入れたフランス瓦葺きで水平のラインを強調した外観を持つ。フランク・ロイド・ライトの意匠の影響を言われるが、かなり訛ったライト風建築であり、それが愛おしい。現在は町立の和紙体験学習センターとして使用されているが、町は老朽化した建物の保存維持に満足な予算を計上しない。公開はされているが、展示も地味である。まずは登録有形文化財の申請をするのが急務だ。

この試験場では、約 40 年前に故リチャード・フレイビンさん（1943―2020 年）というアメリカ人が学んでいる。ボストン出身のフレイビンさんは日本の文化に惹かれて来日。東京藝術大学の聴講生として版画を学んでいる際に和紙を知った。版画の紙を自分で漉くようになり、後に和紙そのものの表現も追求するようになった。彼はまた小川町の人と風土

を愛し、この町の寺を借りて暮らした時期がある。田や和紙の原料になる楮畑を耕し、人と交わり、創作する日々だった。「小川町では生きていることがアートです」という言葉を残している。不幸なことに、フレイビンさんが暮らした寺は 2005 年の火災で焼失。その後は都内に住みながら小川町に通う日が続いた。フレイビンさんは生前、往年の小川町がどれほど美しい町だったか何度も語ってくれた。往還に沿っては大戸のある商家が軒を連ね、水路のある裏通りには暮らしの息づかいが感じられる慎ましい家屋が建ち並んでいた。レンガ造の醤油工場も町なかにあった。小川町にはまたフレイビンさんを慕う人達が大勢いた。彼にとっては、生まれ故郷のボストン以上に愛着のある町だったのではないだろうか。しかし、住まいも工房も別の場所にあったから、「小川町に帰りたい」という気持ちは封じ込めていたと妻の原口良子さんは話す。2017 年、縁があって小川町の高台に小住宅が売りに出ていることを知った。「この建物を見て、抑えてきた気持ちが堰を切りました」と良子さんは振り返る。終の棲家として、また和紙作家の集大成として、フレイビンさんは自ら内装を仕上げた。リビングの床には古い大福帳を貼り、その上に柿渋を塗った。壁には土を混ぜて漉いた紙や墨を塗って雲母をかけて揉んだ紙、藍をスプレーした紙など、さまざまな技法を駆使している。既存のシステムキッチンまで紙で仕上げた。これらがフレイビンさん夫妻のセンスによってひとつにまとまり、唯一無二の世界をつくりあげている。フレイビンさんの没後しばらくして、良子さんはこの建物を公開する決意をした。生前に雑誌の取材をさせていただいたご縁で私にお声がかかり、2023 年からまちぶんが定期的に見学会を開催している。これまで 3 回募集を行なったが、いずれも告知直後に定員に達している。リチャード・フレイビンさんもまた小川町の宝である。彼の作品と生き方に感銘を受ける人が増えることを願ってやまない。それが小川町の魅力を力説してくれたフレイビンさんへの恩返しになれば、なによりうれしく思う。

写真 2. 活用が待たれる和紙体験学習センター
（旧埼玉県立製紙工業試験場）

写真 3. 筆者が取材・執筆をしたリチャード・フレイビン邸の記事（『住む。』2018 年冬号）

シルクロード・ネットワーク　in Yokohama　下仁田から横浜への絹の道

大河原順次郎（元下仁田町教育委員会教育課長）

世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成資産『荒船風穴蚕種貯蔵所跡』を持つ下仁田町からの報告です。真夏でも２℃と言う風穴からの冷風を利用し、蚕種の孵化の時期を遅らせる蚕種貯蔵施設です。風穴での蚕種貯蔵により時期をずらして年に複数回の養蚕が行えるようになり生糸の増産に大きな貢献をしました。

写真１．【生糸の増産に貢献した荒船風穴蚕種貯蔵所】
手前の貯蔵施設が３棟あり番舎と呼ばれた現地事務所建替え時の写真（最盛期の大正時代）

下仁田町は群馬県南西部に位置し、長野県佐久市や軽井沢町に接する山間部の町です。江戸時代、河床も低く稲作に適さない土地が多いことから麻の栽培や養蚕、紙漉きや薪炭の生産、御用林の管理などで生計を立て、街はこれらの産物の取引の市場集落として賑わいを見せました。ここ下仁田から横浜に繋がるシルクロードの一本が中山道の脇往還「下仁田道」です。

ここでは時系列で下仁田と横浜のつながりを紡いでみます。幕末、ヨーロッパでは微粒子病が蔓延し、生糸生産は大打撃を受け、圏外生糸への注目度が高まり、日本の生糸や蚕種の需要が高まりました。そんな中、明治に入り日本の生糸・蚕種の高騰が起こり、その原因を探るため外交官特権を利用しイタリアやイギリスの公使館が現地調査を行っています。イギリスの公使館が明治 2 年から 3 年にかけ関東甲信越を中心に養蚕製糸業の盛んな地域の現地調査を行い本国に報告書を送っています。2011 年富岡市教育委員会が発行した「日本国の養蚕に関するイギリス公使館書記官アダムズによる報告書」にはこう書かれています。下仁田には 1870（明治 3）年 6 月 9 日夕、下仁田に入り、10 日、11 日と滞在し、視察、12 日に信州追分に向いました。この現地調査には書記官アダムズのほか貿易商社に勤める生糸専門家が同行しており、その中にのちに富岡製糸場の指導者となったブリュナも含まれています。報告書には、下仁田を視察地に選んだ理由が「下仁田は横浜市場で売られている最上の絹糸を生産することで常に有名である」からと書かれています。幕末から下仁田の座繰り器で引かれた糸は下仁田提げと呼ばれ横浜では最上級の生糸と評価されていたようです。この現地調査には横浜にゆかりの深いチャールズ・ワーグマンも随行しており「下仁田風景」という水彩画を残しており、現在も神奈川県立歴史博物館に所蔵されています。チャールズ・ワーグマンは 1861（文久元）年、初来日し、1891（明治 24）年、横浜で没するまで 30 年もの間、横浜居留地に住み横浜を離れること無く、今も横浜外国人墓地に眠っています。報道画家であり、近代日本洋画史に貢献した画家として知られ、イラストレイテッド・ロンドン・ニューズの通信画家として随行した際、下仁田の地で書かれたものです。この明治 3 年の現地調査は中山道を本庄で分かれ八幡山（旧児玉町）から藤岡、富岡を経由し、下仁田に入っています。下仁田道は中山道の参勤交代に遭遇した時の煩わしや碓氷峠の険しさを避け、信州と甲州へ向かうことが出来た道で江戸時代から賑わった脇往還で、横浜への絹の道を代表する道でもありました。

一方、鉄路は、高崎～下仁田間を走る上信電鉄が明治 30 年、上野鉄道として高崎～下仁田間、全線開通をしました。地方の私鉄では四国の伊予鉄道に続き二番目に早い時期に敷設された鉄道で、筆頭株主は合名会社三井銀行三井高安であり、株主の多くは富岡市南蛇井以西の養蚕農家であることが、上信電鉄百年史に書かれており、下仁田を中心とした鏑川流域の生糸を横浜に送るために敷かれた鉄道と言っても過言ではありません。日清戦争終結後の好況で生糸ブームがおこり順調に進んでいた上野鉄道建設計画や資金調達も鉄道敷設前に生糸価格の暴落もあり、高崎～南蛇井までの間に計画縮小が検討されました。その時、下仁田の養蚕農家は田畑を売り資金調達の末、下仁田までの路線が確定したとのこ

とです。小口ではありますが南蛇井以西の株主が多い理由です。すでに組合製糸が盛んに行われていた時代で、養蚕農家が組合員となって進められた組合製糸の勢いと生糸への思いが込められていた出来事のひとつです。

荒船風穴蚕種貯蔵所の資料展示がされている下仁田町歴史館に「座繰り組合製糸の活躍と功績」と題した展示資料があり、明治 34 年ごろの横浜入荷生糸の一覧表が載っています。一次資料は「横浜市史」第 4 巻上 85 項とあり、入荷生糸の量、上位 13 荷主の生糸生産手法で大別すると座繰りによるもの６（上州碓氷社、上州甘楽社、上州下仁田社、上州交水社、武州上水社、武州改伸社)、器械によるもの５（信州を中心に)、折返しによるもの２（岩代）となっています。上州座繰りが中心ですが、岩代（福島県伊達郡/安達郡）の折返しについても奥州座繰りを使ってのものであることから座繰り生糸が優位になっていることが解ります。その中でも 2 位の碓氷社を筆頭に甘楽社、下仁田社が上位に位置し、これらの製糸組合三社は上州南三社と呼ばれ、この年、南三社の出荷量を合わせると富岡製糸場の 13.5 倍の生糸を横浜に送っています。富岡製糸場の経営が民間に移行した時期ではありますが、南三社の出荷量は群を抜いています。座繰り製糸は従来からの方法のため、品質に不安をいだく商社もあったようですが、各家で引かれた生糸は小枠で持ち寄られ、太さや色艶などを揃え、大枠で揚げ返しを行うなど製糸組合の品質管理の徹底により、品質においても優れた生糸生産を行っていた結果です。上州の生糸を語る上でこの地方の組合製糸を欠くことはできません。

このほかにも組合製糸に関連した資料展示は数多くあり、生糸に貼られた各社のラベルや、南三社の正副社長 6 名の写った写真も展示されています。その裏には 6 名の肩書と氏名が記され、「明治三拾九年一月廿三日横浜市本町四丁目渋澤商店邸内ニテ撮影」と墨書きされています。横浜とは太いパイプをもち、繋がっていたことを示す証しかもしれません。

横浜と下仁田を紡いだのは座繰りによる組合製糸の良質の生糸であり、横浜へ向かう太い二本の絹の道は下仁田道、上野鉄道でした。

写真２．【生糸に貼られた商標ラベル】
横浜には多くのラベルが残されています

写真３．【群馬蚕絲製造株式會社下仁田工場の生糸】
下仁田社の後を引き継いだグンサンの生糸
ラベルにはGUNMA SANSHI SEIZŐ CO.LTD SHIMONITA MILL ともあり、下仁田の糸への評価の表れかもしれません。

今井泰徳（群馬県南牧村総務部村づくり雇用推進課）

○村の概要

南牧村は、群馬県の南西部にあって、東と北は下仁田町、西は長野県佐久穂町と佐久市、南は多野郡上野村に接しています。

地形は 1,000m内外の山々に囲まれ急峻で平地が少なく、東に開けています。

気候は、内陸性気候であるが比較的温暖で年間平均気温は 10℃内外、雨量も 1,300 ㎜程度で雪も少なく、山間のため上州名物のからっ風はなく住みやすい環境にあります。

山々は、険阻な峰や絶壁等が多く、北と西は妙義荒船佐久高原国定公園内にあり山紫水明の自然豊かな美しい村です。

村のほぼ中央を西から東へ流れる南牧川とその支流に沿って集落が点在しています。

かつては、林業、農業（養蚕、こんにゃく栽培など）が産業の中心でしたが、社会情勢の変化により衰退し、人口減少の原因ともなっています。

近年では、高齢化率「日本一」、消滅可能性自治体「日本一」と、様々なメディアで取り上げられ、全国から注目を集めています。

【高齢化：南牧村では「幸齢化」ともいう。】

令和 5 年 12 月末日現在　人口 1,504 人、879 世帯、14 歳以下 2.39%、65 歳以上 68.09%、75 歳以上 45.01%です。

写真 1．観能集落

写真 2．星尾大上集落

写真 3．大仁田集落

写真 4．南牧村遠望（大日向集落）

＊古民家を活用した移住施策

都会の喧噪から離れ、田舎暮らしを希望する方や自然の中で子育てを希望する子育て世帯などの移住に力を入れ、古民家の空き家物件の紹介や仲介等に力を入れるとともに、村で借り上げあるいは購入した古民家を改修し貸し出すことにより、村への移住・定住の促進に積極的に取り組んでおります。

また、移住に向けて古民家を利用した「体験民家」を運営し、実際に南牧村での生活を体験することにより移住の促進を目指しています。

写真 5. 古民家再生事例

＊移住者、U ターン者の状況

村として、移住施策に取り組むとともに、移住してくる者の雇用の場を提供できるような対策にも取り組んだ結果、平成 23 年度以降、ターゲットとしている子育て世帯を含め、70 世帯、98 人が移住してきています。

また、雇用の場を創出したことにより、I ターン者も生まれました。

しかしながら、自然減、社会減による減少は相変わらず、人口減少を止めるには至っていませんが、減少のペースは鈍化しています。

＊行政が目指すこと、していること

人口減少を止めることは難しいと思うが、その現象のスピードを鈍化させること、また、日本一となっている非常に高い高齢化率を低減させること、これらを目指して、主に子育て世代の移住を推進すべく移住に注力しています。

その受け皿として、村内に眠っている古民家を発掘し所有者との連絡調整、改修など行っています。

＊「南牧山村ぐらし支援協議会」の活動

平成 22 年 12 月に「南牧山村ぐらし支援協議会」が設立され、現在は 26 名の会員で活動しています。

村内全域の空き家を調査し、平成 23 年 8 月には村のホームページ上に「空き家バンク」を開設、その後随時更新しています。

その他の活動としては、移住者同士、移住者と村民の交流会を計画実施し、移住者の村での生活を支援しています。

また、「山村ぐらし通信」を発行し、移住者の現況などを掲載し配付しています。

写真 6. 古民家再生事例見学会

関東のキリスト教と養蚕製糸

藤岡　一雄（NPO 法人　街・建築・文化再生集団顧問）

序　―近代上州のキリスト教と養蚕製糸―

群馬県の近代史の二大象徴は養蚕・製糸とキリスト教にあると言われている。要は群馬の養蚕隆盛の背景にキリスト教、乃至はキリスト教的・西洋的思想、手法が預かって力あつたと思われるのである。要は、明治以降の近代上州のあゆみを辿ると、その中に必ずと云って良いほどにこの地に展開されたキリスト教とキリスト教伝道に関わる無数の歴史・社会・習俗・建造物等の文化との出会いが認められる。とりわけ養蚕・製糸との関わりでは、これまでシルクロード・ネットワークを通して各地のシルク産業の実態を学んで来て、それぞれに共通点や特徴あるあゆみや相違も認められる。今回の横浜開催でも当地と、関東地方の上州群馬、隣県の武州埼玉とのキリスト教との関わりやその深さ、相違の一端につき触れられたらと考えるものである。

1. 上州のキリスト教

上州群馬は明治以来、新島襄・内村鑑三の二大クリスチャンを輩出し、地方では稀な一大キリスト教県とも称せられてきた。群馬は、海なし県であったにもかかわらず養蚕・製糸とキリスト教を通して海外と結びつき、近代文化等の諸分野で欧米の大きな影響を享受し共有して来た。取り分け、鎖国下の幕末アメリカに渡った新島が帰国後の明治 11 年安中教会を創立したことは封建遺制下の上州の人と社会の近代化に決定的影響を与えたと言えよう。明治 10 年代に始まるロシア正教会の伝道も力あって、十字架を掲げた教会堂の甍が前橋中心の平野部のみならず利根・吾妻の山間僻地にまで聳え立つ姿や可能性が秘められていたことを今日的に伺い知るものである。同時に、当時の教会の実相を垣間見ると新島襄とその教会を始め諸教会は実に様々な教派母体から成り立っている事、群馬に隣接する埼玉でも同様の事態が進行し、また、相違も垣間見え、興味深い。

明治 20 年末の群馬県の統計では信徒数が 985 名で東京、大阪、神奈川、兵庫についで第５位、1 万名当たりの信徒数が東京、神奈川北海道に次ぎ第４位　14、75 名であつたと伝えられる。また、群馬の新教教会会派は組合 10（安中・甘楽・西群馬・原市・前橋・沼田・緑埜・吾妻・名久田・須川)、一致（桐生)、美以（島村)、独立（西群馬）各１の 13 教会から構成されている。

2. 新島襄と組合教会

群馬最初のプロテスタント教会は安中教会（明治 11 年 3 月 30 日）で、明治７年、アメリカン・ボード准宣教師としてアメリカから帰国した新島が創立したものである。

新島の教会は組合教会と略称され、正式には米国外国伝道委員会と呼称し、明治 2 年 D,C,グリーンが来日して関西を伝道の中心とするが、横浜から発展したプロテスタント諸教会との協定もあって群馬の組合教会は困難さを抱えつつも東日本で最大の範図を形成したものである。そのセンターは県都前橋に置かれたマエバシ・ステーションと呼称され、明治 25 年建造の宣教師館一棟が現存している。

その他には一致・長老教会の桐生教会があり安中教会と相前後する同年、11 月９日、東毛の織都桐生に生糸貿易商石井政平を先駆者とするアメリカ長老教会の日本基督一致桐生教会が設立された。現在の錦町教会である。設立式の際議長をつとめた小川義綏は明治 2 年タムソンから受洗、明治 8 年東京築地新栄教会設立に尽力、明治 10 年の日本基督一致教会創立のさい按手礼を受け日本人としては最初の牧師となった。

そして、島村教会は群馬県佐波郡島村に所在する。地理上は利根川添いの群馬・埼玉両県境に位置し、行政上は群馬に、地誌的には埼玉とも深い関わりを持っている。江戸末期から蚕種製造が盛んで、養蚕製糸研究のセンター的地域でもあり、明治初年には島村勧業会社を立ち上げ横浜に進出、蚕種のイタリア輸出を敢行している。島村のキリスト教伝道は明治 10 年頃栗原茂平等が横浜でバラの感化を受け帰村して始まるとされ、熊谷の伝道師小森谷常吉の来村を経て、20 年 4 月 12 日、その当事者栗原等による講義所献堂式がメソジスト美以教会のコルレルを迎えて挙行された。この日が日本基督一致島村教会の設立となったものである。県内には他に同派の教会堂は伊勢崎教会（明治 21 年 7 月 24 日）もあるが、同派はむしろ、隣地本庄教会始め武蔵・埼玉地域の教会が主流である。

3. 埼玉の養蚕製糸と美以教会

平成 28 年度、山形県新庄市でのシルクロード・ネットワーク大会で埼玉の染井佳夫会員のご発表「旧石川組製糸西洋館と石川組製糸」に始まる入間市の石川組製糸と基督者石川和助に関するご研究は特にキリスト教研究に関心ある者にとつてはまさに圧巻であった。急逝（2021 年 10 月 17 日）の報に接し遅ればせながらご冥福をお祈りします。

この石川組製糸所は明治 26 年、石川幾太郎が現埼玉県入間市に創始した。座繰りから機械製糸に切り替え、弟のキリスト者和助の助言もあって自らも受洗、キリスト教を会社経営の中心に置くことを家憲・家訓の中で明示し、女工の教育を始め雇用の改善策を、取り入れ、大正 10 年代には横浜での生糸入荷番付で西の関脇、出荷高６位の製糸会社に発展したものである。その後、関東大震災や諸恐慌を経て経営を縮小し、昭和 12 年石川組は解散を迎えることとなるが、特記すべきことは、石川家に連なる人々の殆ど全員がキリスト者となられている事である。石川和助の存在の大きさと重さが背景をなすことは言うを待たない。平成 14 年に刊行された『石川家の人々』はこの事を控えめに、誇らしげに綴られていて読む者を思わず固唾を飲ませる歴史書と言えよう。

写真 1. 開港広場と横浜海岸教会

和助は明治 19 年、築地明石町美以教会でハリスから受洗し青山英和学校に学んで伝道者の道を辿るが、以来、石川家所在地・和助の巡回地豊岡・入間・川越はドレーパルや山内庫之助等の尽力もあって旧メソジスト派の活動地となり、現在の武蔵豊岡教会に繋がれている。

同教会のみならず、関東否、全国各地のキリスト教会の地方伝道の起点は横浜・築地の開港地・居留地に幕末から明治にかけて来日した諸宣教師の方々と、方々の起した基督公会（新栄教会）・築地バンドに結集した日本人信者で牧師として各地での伝道の先達となった方々の活躍があっての事であり、地域社会の諸方面に広がっている。

4. 新島襄と組合製糸碓氷社

明治 11 年 8 月、農業の副業とする座繰り製糸の粗製乱造による生糸の改善策を求めて碓氷座繰り製糸社・碓氷社が、安中教会の成立と相前後して安中教会所在地の西上州の一角に発足する。正教会の深澤雄象等の有志協同製糸会舎に続くものであつた。萩原鐐太郎等新島に魅せられていた西上州の有力農民は教会を通して「新島メモ」（湯浅与三「新島襄伝」）に見られるような禁欲的職業倫理に駆られていたのでこれに賛同、また当時の松方財政下に破綻した碓氷社再建にも共々尽力して発展した。要は、一人一株 20 円以上の出資金、10 人で小組合、10 組で組名を別にするとされ、また、組合員一人が女工一人を会社に入れることとし、利益配当は原則売上高百分の二を会社に出し、後は組合員に生産払いする方式であつたと言われる。会員は当初、103 名にすぎなかったが明治末年には 270 組を数え、地域も郡内、県外へと拡大、県内では甘楽社・下仁田社を併せて南三社と呼称された。各組員が生産から生活に至るまでの情報を共有し、住宅兼工場の特徴ある養蚕農家・上州民家を出現させ、全国各地にまで普及させた。同組合の初源的ルーツがここ上州にあつたことは特記に値する。加えて、明治 33 年成立の産業組合法成立の範例となったものである。東毛ではさして進展しなかったとも言われるが、県内全体では当然、その後も継承され、昭和 2 年の群馬社（～同 26 年）はその典型例である。農協の淵源とも言うべき組織であり、世界ではユネスコ等で今もなお推奨される初源的協同組合方式である。キリスト教自体はその後愁眉を開かせるような広がりを見せることはなかったが群馬の組合製糸は他県には見られぬ一大発展を遂げたといえよう。先記した新島メモは新島が安中を出立の際、教会の重鎮千木良昌庵のために書き残したものが知られている。19 項目からなる信仰入門と生活改善指針とも言われる次のようなものが伝えられている。

「他人を愛すること己の如くすべし且己の人より求む所の全総ての事宜し句己より人に施す可し」（「新島メモ」６項）

組合教会の名称もまた、その根拠を群馬での組合製糸採択の方式に重複するかのようなものとも把握していたとも見られるのである。組合製糸碓氷社の歴代社長（初代萩原鐐太郎・次代宮口二郎以下）や重役には基督者が占められていた。組合製糸の名称は養蚕県群馬の呼称とともにあり、組合教会の名称もまた対語としてのキリスト教県群馬の教会らしさを示す用語とも言えよう。

英国で前橋生糸「マイバシ」に遭遇して～165 年前の生糸が伝えること

藤井　美登利（NPO 川越きもの散歩・さいたま絹文化研究会）

この冬、リヨン、ロンドン、マンチェスターなどを訪問する機会を得た。私が編集を担当している「さいたま絹文化通信」において富岡製糸場でポールブリュナの通訳をつとめ、横浜正金銀行リヨン支店を開設した川島忠之助についての連載しており、絹の街リヨンに実際に行ってみたくなったのだ。また、元川越藩士で前橋藩営製糸所を設立した速水堅曹のご子孫、故速水美智子さんから「ロンドンでは日本の生糸のことをマイバシと呼んでいた程、前橋の生糸は質も量もすごかった」と何回も伺っていた。私は英国航空勤務時代の 30 年前にロンドンを頻繁に訪れていたが、当時は絹のことなど興味がなく、劇場と買い物に明け暮れていたのが惜しまれる。今回、思いがけなく幕末に輸出された生糸「マイバシ」に、ロンドンの博物館で出会ったので紹介したい。

◇ロンドン　ドックランド博物館

２００３年にロンドン博物館の分館としてカーナリーワーフに開館。建物は 1802 年建造の西インド会社（カリブ海の英国植民地の品物を扱う）の砂糖倉庫を利用しており、１７世紀から第２次世界大戦までの間、シルクやスパイス、紅茶、アフリカ人奴隷の売買、などで世界一の貿易港として栄えたロンドンのドックランズ（造船や倉庫など）の歴史を伝える。貿易船の出入りや荷役を管理していたロンドン港湾局（ＰＬＡ）から譲り受けたものを主に展示している。衰退していたエリアだが１９８０年代から再開発が行われ、ロンドンの第二の金融街として高層ビルの立ち並ぶ近代的な街へと大変貌を遂げた。

写真 1.　ロンドン　ドックランド博物館

◇「MAIBASHI」前橋生糸とロンドンで遭遇

写真 2.　MAIBASHI silk Japan　と書かれている

キャプション：ロンドン税関がサンプルとして保存していた輸入品。象牙や虎の毛皮とともに棚の中に「MAIBASHI silk Japan」　と書かれたシルクの綛が展示されていた。隣には Kanton（広東）シルクがあった。

※注：『前橋生糸相場は 1858（安政５）年から 1867（慶応３）年にかけて 6 倍以上に高騰している、前橋に集荷された上州産生糸は「前橋堤糸」（さげいと）と称され、その品質は外国商人からも高く評価された。当時、前橋堤糸は国産生糸の最高峰であった。ゆえに、日本産生糸をヨーロッパでは「マイバシ」と呼んだ。』　「下村善太郎と若尾逸平～初代前橋市長と初代甲府市長」下村洋之助・磯尚義著　より

◇国際商品・生糸「マイバシ」と川越藩～

1859（安政６）年に開港場で貿易が始まった当初から生糸は最大の輸出品だった。はじめは上海経由でロンドンに運ばれ、日本の生糸の取引はロンドンが独占していた。しかし、スエズ運河が 1869（明治 2）年に開通すると、地中海を経てマルセイユ経由でリヨンに運ばれて生糸取引が行われるようになった。ロンドンやリヨンでは日本の堤糸（生糸）の産地が分からないので、堤糸すべてを前橋「マエバシ」と呼んでいたという。(『開港とシルク貿易』小泉勝夫)　幕末最大の日本生糸取扱い商社の英国商社ジャーデイン･マセソン商会横浜支社(以下ジャーデイン)の生糸ランク付けによると、前橋と信州の生糸が当時の日本の最高級の生糸として評価されていたことがわかる。それを知ってか川越藩は文久 2 年（1862）に前橋糸を扱う横浜の生糸問屋 5 軒を指定し、それ以外の問屋に出荷しないように「触書」を出している。その目的は、藩が生糸の利益を独占することではなく、当時、ジャーデインら外資が、条約の規定を違反してひそかに産地へ直接買い付けを行うことが多発しており、外資が流通利潤を奪おうとするのを防ぐためだったという。ジャーデインは前橋や上州を避け、奥州で直接買い付けを行っていたが失敗し、多額の損害を出している。その後、藩は横浜に生糸売込み商店「敷島屋」を開設し、産地買い付けをあきらめたジャーデインはこの「敷島屋」から前橋糸を仕入れるようになった。1869 年には仕入れ額の 58%、70 年には 90%にものぼった。それら前橋糸がロンドン市場に運ばれたのだった。

前橋糸の売り上げで財を成した前橋商人たちの寄付を受け新築した前橋城（別名お蚕城）に移った川越藩（前橋藩）は、生糸の品質保持のため生糸改所を開設した。英国は公使館員アダムス一行（ジャーデイン社員も含む）を前橋近隣の養蚕地帯に派遣し、日本の生糸事情のレポートを作成。日本に近代的製糸場の開設を促していく。ジャーデインは前橋藩に製糸場の共同経営を持ち掛けてくるほどであった。しかし前橋藩はそれを断り、速水堅曹ら藩士が技術を習得し、外資を頼らずに日本で初めての器械製糸所が前橋に生まれたのである。

ロンドンで私の目の前に現れた「マイバシ」は、165 年前に開国した極東の小さな国が、荒波にのみこまれないよう必死に生きた時代の結晶のように見えた。

※注：参考資料　石井寛治「幕末維新期の前橋生糸商の活躍」　「速水堅曹資料集」速水美智子編

◇ロンドンのシルクタウン　―スピタルフィールズ

1685 年にルイ 14 世のナントの勅令の廃止によって、フランスの宗教的寛容政策が停止されるとフランスのユグノー（プロテスタント）たちが、ロンドンに避難してきた。イーストエンドのスピタルフィールズには、高い技術をもつユグノーの絹職人が多く移り住み、さらに 1789 年にフランス革命が勃発するとベルサイユ宮殿など貴族向けのテキスタイルを作成していたリヨンの絹職人たちも、仕事を求めてロンドンに移住した。英国は外国製シルク製品の輸入を禁止する法律を作り、自国の絹産業を保護したので、18 世紀にはこのエリアに２万人のフランス人絹職人が住み、最高級のシルク製品を生み出す産地となつた。ビィクトリア女王のウエディングドレスを作成した工房の建物も現存している。その後英国は産業革命により木綿織物が盛んになりシルク産業は衰退していった。

写真 3. フランスから避難してきた裕福な絹商人ジョーダン家が 1756 年に建てた店舗付き住居

このエリアはドックランドで働く移民を受け入れる地域となり、ユダヤ人、ポーランド人、バングラディシュ人などが住むようになる。ユグノーの教会はユダヤ教に変遷していく。現在も下町の雰囲気を残し物価高のロンドンで若者に人気の活気のある場所となっている。

写真 4. 多くの絹職人が住んだ建物、天井に明り取りの窓が作られている

※注：参考資料　『London’s hidden walks』『V&A Spitalfields silk』

生糸の街前橋

岩崎桂治（前橋絹文化研究会）

前橋市は群馬県のほぼ中央、赤城山南西に位置する県庁所在地です。東京上野駅からはＪＲで高崎を経由し約 111 ㎞、関東の大河利根川が市の中心部を流れています。群馬県では古くから気候風土に適した蚕糸織物業が行われており、江戸時代には前橋など各地で絹市も開かれ、桐生・伊勢崎の織物業、島村・前橋の蚕種業、中西部を中心とした養蚕、そして中央部の前橋は“生糸の街”として発展してきました。

１　生糸の街前橋の誕生

前橋は江戸時代後期には上州座繰りの発明など製糸業が盛んでした。安政６年(1859) 横浜開港と同時に上州（群馬）商人の生糸取引、とりわけ下村善太郎（前橋市初代市長）らの前橋商人の財力で県庁誘致等前橋市の礎が築かれました。

明治３年(1870)、前橋に日本で初めての洋式器械製糸所（イタリア式）が誕生します。明治５年(1872) には富岡に官営富岡製糸場（フランス式）が創業しますが、群馬県はすでに座繰製糸が普及しており、前橋が器械製糸に代わるのは明治末期になってからです。

〈器械製糸所跡碑〉

２　前橋製糸業の発展

明治 11 年(1878)前橋の地元製糸結社・交水社が士族授産の目的で設立されました。明治 44 年(1911)には前橋の生糸生産額の 79%、大正 14 年(1925)の横浜の生糸出荷額で全国第５位を占めました。明治期には形態も規模もさまざまな製糸工場が 200 近く創業しましたが、大正時代の第一次世界大戦後の不況や関東大震災、昭和初期の世界恐慌等で製糸工場は大規模化していきました。全盛期である大正末期の製糸工女は１万 2,000 人を超えました。太平洋戦争を挟んで交水社が解散する昭和 35 年(1960)頃までは、まさに前橋は全国に知られる“生糸の街”でした。

〈交水社本社跡〉

３　前橋製糸業の終焉と絹遺産

戦後一時復興した製糸業も化学繊維、洋装化等から蚕糸業全体が衰退する中、昭和 56 年(1981)前橋の製糸業最後の砦、丸登製糸（片倉製糸系）、グンゼが創業を停止しました。その後、跡地の多くは商業施設やマンション、駐車場となっています。ただ、繭や生糸を保管したレンガ倉庫は、取り壊されつつもいくつかは現存し、往時を偲ばせています。なお、群馬県安中市の碓氷製糸は現在も稼働し、日本の製糸業を牽引しています。

〈旧安田銀行担保倉庫〉

前橋絹文化研究会の活動

1　目的　県都前橋の礎となった絹産業の記憶を蘇らせ、その調査研究とまち歩きガイドによって前橋の歴史と文化、その魅力を多くの人たちに伝えていくことを目的とする。

2　設立　絹ラボ奨励金事業（絹産業の調査研究）の参加を契機に、前橋学市民学芸員を対象に会員を募集し、令和２年６月２０日発足。翌年から市民学芸員以外の方にも会員枠を拡大。会員数現在 13 名。

3　これまでの活動内容

1）　前橋の製糸業に関する聞き取り調査
＜28 件、32 人＞（令和 2 年度）

2）　まち歩き見学会準備（研修、解説集と
まち歩きまっぷ作成）（令和 3 年度）

3）　まち歩き見学会（ガイド）の実施（西・東・南
エリア各１回）（令和 4・5・6〈予定〉年度）

4）学習会（講演会）

・前橋の製糸業　（令和２年度・当会会員 岩崎桂治）
・群馬の養蚕業　（令和３年度・当会アドバイザー 齋藤敏弘）
・下村善太郎と善右衛門　（令和４年度・下村洋之助氏）
・風穴について　（令和４年度・飯塚聡氏）
・前橋の製糸業〈県外資本製糸〉　（令和５年度・片倉正彦氏）
・絹のことば　（令和６年度予定・新井小枝子氏）

5）見学会

・富岡市（富岡製糸場）、安中市（碓氷製糸）他　（令和２年度）
・桐生市（絹織物）（令和３年度）
・熊谷市（片倉ｼﾙｸ記念館）、深谷市、本庄市　（令和３年度）
・下仁田町（荒船風穴他）（令和４年度）
・長野県上田市（常田館製糸場、上田蚕種他）（令和４年度）
・前橋市蚕糸記念館、旧塩原蚕種他　（令和５年度）
・伊勢崎市（徳江製糸場、島村の蚕種農家）（令和５年度）
・長野県諏訪・岡谷・駒ヶ根　（令和５年度）
・前橋市総社町山王地区の養蚕農家他　（令和６年度予定）
・八王子市・横浜市等の織物工場・博物館他　（令和６年度予定）

6）その他

・前橋の絹文化遺産シンポジウム　（令和５年度）
基調講演「前橋藩営製糸所と武蔵や伴七を追う」（野本文幸氏）
パネルディスカッション「絹産業施設・史跡の案内版等の設置及び既存施設の保存と活用」
（パネラー：県内絹産業施設等の案内団体代表者５名）

聞き取り調査（令和２年度）

まち歩き見学会（令和４年

学習会（令和５年度）

上田市見学会
（令和４年度）

岡谷市見学会
（令和５年度）

旧安田銀行担保倉庫、前橋乾繭取引所開設をめぐる考察

村上雅紀（上州文化ラボ）

前橋市住吉町に建つ旧安田銀行担保倉庫北側の敷地に戦後、前橋乾繭取引所が開設されました。当倉庫や当取引所が開設される背景について考えてみました。

・旧安田銀行担保倉庫が建てられた背景

このあたりで繭の取引きが行われてきたことを記す額「繭市場設立の額」が住吉町二丁目に所在する愛宕神社社殿東側に掲げられています。この額は元々、当倉庫北側敷地の八坂神社にあったもので 2000 年代に愛宕神社に合祀される際に移設されたものです。この額には、明治 17 年(1884)、高崎の糸繭商人とともに細ケ沢町(現住吉町)に繭市場を設立したと記されています。

写真 1. 愛宕神社社殿東側に掲げられている「繭市場設立の額」

当倉庫が建つこの地域は広瀬川の北側に位置し、旧利根川が流れていたことより地下水が豊富で水資源に恵まれてきました。また、佐久間川や吉野川、風呂川、多くの水路により水脈豊かで製糸工場に必要な大量の水が確保できる地域でした。そのような背景より明治期以降、多くの製糸工場が建てられ原材料として必要な繭が集散される場所にもなっていきました。明治末期、一大製糸工場地帯となっていたことや養蚕・製糸技術の革新(多蚕や繭乾燥・貯蔵技術)、貨幣経済の発展により年間通じて繭貯蔵の必要性が高まり、安田銀行系列の群馬商業銀行前橋支店細ケ沢出張所の開設が計画され、大正 2 年(1913)に乾繭の保管倉庫、繭乾燥場とともに竣工しました。もう一点、当倉庫が建設される背景として明治 43 年(1910)に一府十四県連合共進会が前橋市で開催されたことの影響も考えられます。現在の県民会館(日吉町)の敷地を第一会場に本市をあげて盛大に開催されました。この共進会を機に、前橋市は大きく躍進し当倉庫が建つ中心市街地北側の地域も発展をみます。その後、大正、昭和と養蚕・製糸業は前橋市の基幹産業として益々大きくなっていきます。
昭和 20 年(1945)8 月 5 日未明にかけてのアメリカ軍による空襲被害を奇跡的にまぬがれて当倉庫は残存しました。当倉庫南側にあった同規模の倉庫はこの空襲により焼け落ちています。その後に倉庫北側に前橋乾繭取引所が開設されることになりますが、元々この地が一大製糸工場地帯であり繭の集散地であったこと、また当倉庫が空襲被害のなか生きながらえたことは、戦後この地に乾繭取引所が開設される要因になったと察します。

前橋乾繭取引所

戦後、前橋市は荒廃した社会情勢から徐々に活力を取り戻していくなか、本市の産業振興、失業救済、市財政への貢献などを目的に乾繭取引所開設の必要性が製糸業関係者の間で話し合われていきます。昭和 26 年(1951)、繭と生糸の現物取引を行う機関として細ケ澤町(現住吉町)に協同組合前橋商品市場が設立されます。これを契機に翌昭和 27 年(1952)、乾繭の先物取引を行う機関として前橋乾繭取引所が設立されました。初代理事長は大林峰太郎氏。豊橋乾繭取引所とともに繭取引きを公正円満に行う機関として始動、日本の乾繭相場の基準となります。取引所が開

写真 2. 前橋乾繭取引所外観

前橋商工会議所創立百周年記念誌より

設されたことにより戦後、前橋市は高度経済成長期をえて飛躍的に発展していきます。その後、取引所は施設が手狭になってきたことや老朽化もあり昭和 52 年(1977)住吉町から古市町に移転、その後平成 10 年(1998)に解散となりました。

前橋乾繭取引所開所式に読まれた大林理事長の式辞や各方面からの祝辞が当倉庫に保管されています。これらの書状には、日本蚕糸業への思い、これからの強い決意や期待をする言葉が力強く書かれています。蚕糸業の振興に注力され本市のみならず日本経済に大きく貢献されてきた先人のみなさまのご努力に敬意を表するとともにその思いや歴史を受けとめ伝え残していかなければと思います。

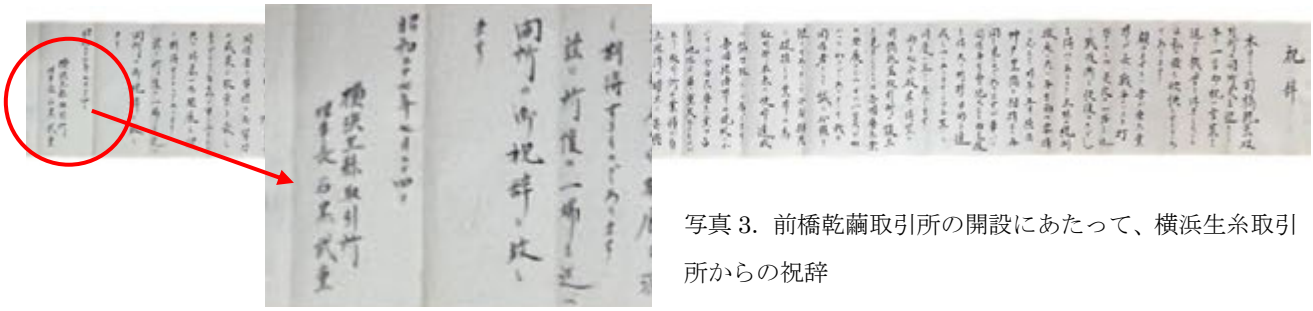


写真 3. 前橋乾繭取引所の開設にあたって、横浜生糸取引所からの祝辞

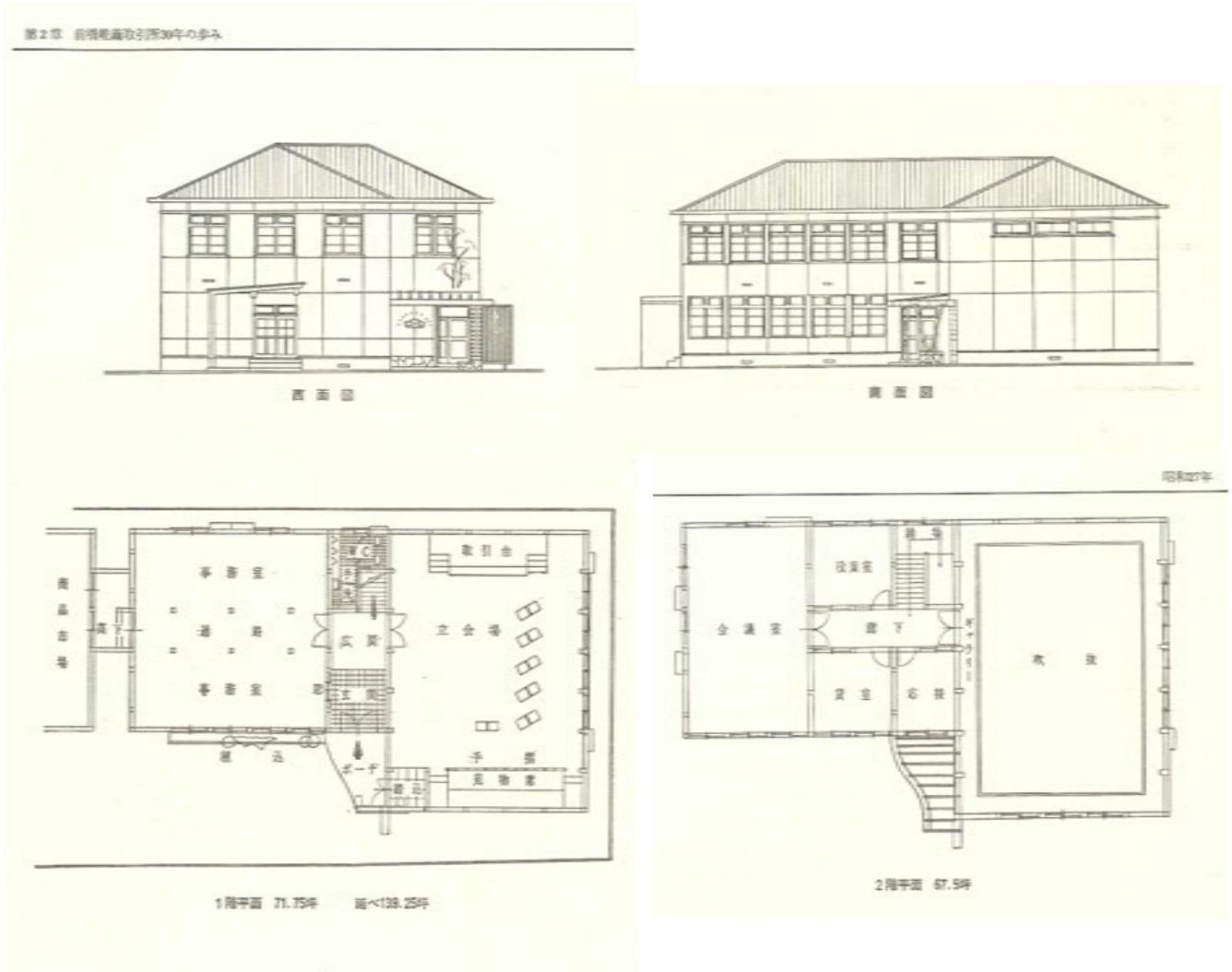


図 1. 前橋乾繭取引所の図面

参考文献：:前橋乾繭取引所 30 年史、前橋市史、前橋絹遺産 MAP

幕末から明治にかけて横浜で躍動した上州人

中村　武（NPO 法人　街・建築・文化再生集団）

開港間もない横浜で、生糸売込み商として躍動した上州人（群馬県人）が、少なからずいたと聞いていますので、上州と横浜を繋ぐシルクロードとしてご紹介をしたいと思います。有名な中居屋重兵衛の屋敷跡には解説板がおかれていますが、その他の上州人についてはあまり知られていません。私の知識では、加部安左衛門、中居屋重兵衛、茂木惣兵衛、伏島近蔵の名前ぐらいしか出てきません。心許無いので、『みやま文庫　群馬の生糸』の中に萩原進先生が、「横浜開港と上州商人」という項で書かれていますので、そこから私の勉強を含めて、拝借したいと思います。

図 1．中居屋重兵衛屋敷跡跡の解説板

安政五年（1858）に調印された日米修好通商条約により、安政六年に横浜が開港されます。従来、長崎の出島でオランダと支那（中国）だけに許されていた貿易が、横浜港を介して世界に拡がる事となります。目の長けた商人や野心家にとって恰好な機会と映ったはずです。江戸幕府も外国に対して横浜の体裁を整えるため、地割りを行い、出店を募集、あるいは強制的に各地の豪商、有力者等に出店を命じたようです。上州からも多くの人達が夢を求め横浜を目指したものと考えられます。

①．加部安左衛門

②．中居屋重兵衛

③．吉井（穀屋）清左衛門

図 2．安政六年六月の横浜町割図　横浜市史第 2 巻所収の図を萩原進先生が著書に掲載した図を転載

安政六年の町割図に画かれているのは、加部安左衛門、中居屋重兵衛、吉井清左衛門の 3 名ですが、その他の人物を含め、前掲の書から見てみたいと思います。

加部安左衛門：加部安左衛門家は上野国（群馬県）吾妻郡大戸村（現東吾妻町大字大戸）に代々続く素封家で、上州三分限者「一加部、二佐羽、三鈴木」と言われ、九代目安左衛門（嘉重）が安政六年に横浜に出店した、巷間に言われている「加部安」です。商い品目は、主力の生糸を始めとして、麻、紙、煙草、薬種、乾物などでしたが、家業は番頭に任せ、商売には身が入らず、結局、慶応二年には横浜を引き払い、その後破産しています。各地を転々として明治二七年（1894）五月に高崎柳川町で亡くなりました。

萩原先生は「上州の片田舎から国際貿易場に出た冒険がいけなかったのではあるが、こうした失敗は加部安のみではなく、他の上州の生糸商にも共通していたことである。」と書いています。私は全てがそうでは無いと思っています。

中居屋重兵衛：本名は黒岩撰之助、吾妻郡中居村（現吾妻郡嬬恋村大字三原）の旧家黒岩家に文政三年に生まれました。二十歳で江戸に出て、見習い奉公から、苦心をして郷里で覚えた火薬製造販売から、江戸日本橋に中居屋を名乗る店を出し江戸でも屈指の商人になったそうである。安政六年四月から江戸の店を整理し横浜本町四丁目に間口三十間の銅御殿と言われる店を構えました。文久元年に画かれた錦絵に中居屋と思われる建物だけが豪壮に画かれています。

生糸商いでは、上州を始めとした在地糸商から生糸を仕入れ、外国商に売り渡し、膨大な収益を上げていました。一説には、最初の生糸輸出を行ったのは重兵衛であると言われています。文久元年（1861）に禁制を犯したかどで捕らえられ、放免になった後、横浜から姿を消し歿年は不明です。「横浜開港を機に多くの上州人が出店した中で最も活躍した風雲児・・上州生糸の輸出に果たした彼の功績は大きかったことだけは間違い有るまい。」と書かれています。

根岸（吉井）清左衛門：多野郡吉井町（現高崎市吉井町）の分限者、屋号は穀屋と言ったそうです。安政五年十二月に幕府の募集により応募、願書が残されています。商いは、上州の生糸、高崎の館煙草、藤岡の日野紙、桐生の呉服、信州の産物、漆器類を願い出ています。拝領した場所は、町割図によると中居屋の隣です。明治早々には横浜を引き上げているようです。

藤生善三郎：山田郡桐原村（現みどり市）屋号を藤屋籐三郎とし、生糸売込商で万延元年（1860）の資料には、横浜四丁目に中居屋、穀屋と共に生糸商として載っているそうです。上州商人としては成功者の一人と書かれています。

茂木惣兵衛：文政十年（1827）に高崎の質商大黒屋惣七の長男として生まれています。横浜では中居屋重兵衛に次いで成功した人物と称されているようです。上州で絹や生糸を扱い、安政六年に横浜へ行く、武州児玉出身の野沢庄三郎が興した野沢屋の跡を継いだようです。明治に入ると横浜為替会社を設立、第二国立銀行の副頭取などを勤めています。川越の時報鐘楼の明治再建に原善三郎等と名前を連ねています。

田部井芳兵衛：新田郡尾島町世良田（現太田市世良田町）出身、慶応二年（1866）の記録に名前が出ているそうです。横浜本朝三丁目に山本屋の屋号で生糸と蚕種を商っていました。

不入屋（いらずや）次平：生糸の集散地大間々と関係が深く、文久三年（1860）最初に海岸通三丁目に出店、その後南仲通三丁目で本格的に店を構え、生糸の売込み商として活躍、歿年は不明で、明治期支配人が跡を継いだそうです。

金子五兵衛：勢多郡新里村（現桐生市新里村）生まれ、若くして八王子で製糸業に携わっていましたが、安政六年に横浜に移住、阿波屋と称して生糸売込商として成功したそうです。横浜市会議員や銀行の頭取にもなり、晩年は悠々自適の生活を送った様です。

吉田幸兵衛：金子五兵衛と同郷で村の富農の出身です。金子五兵衛と共に横浜に行き、上州からの生糸を主に扱ったとそうです。生糸売込商として成功し、明治三年（1870）アメリカに銀行制度調査の伊藤博文に福地源一郎等と随行しています。明治六年に横浜生糸改会社の副社長に選ばれます。渋沢栄一、渋沢喜作とも親交があり、その後ろ盾があったとも言われています。「上州人の数多い生糸売込商の中でも、明治までのこって成功した一人である。」と萩原先生は評価しています。

伏島近蔵：新田郡薮塚本町（現太田市薮塚本町）の富農で旧家に生まれています。慶応元年（1865）に横浜に移住、屋号を田辺屋と称し、主として生糸、蚕種、茶、海産物などの貿易商として知られています。明治十一年、茂木惣兵衛らと第七十四国立銀行を創立して頭取になります。明治十三年、島村蚕種のイタリアへの直売りにならい、蚕種を売りに行くが失敗、莫大な負債を背負うが、意に介さず、数年で元を取り返したそうです。横浜の関外埋立地の開拓事業に取り組み、道路整備などを行い新開地の基を作ったそうです。新吉田川、新大岡川の開削、橋梁 6 橋の架設など公共事業に私財を投じています。明治三十三年横浜市会議員当選、参事会員、市瓦斯局委員長にもなっています。郷土愛が強く郷里の薮塚に小学校なども寄附などもしております。萩原先生は「横浜における傑出した上州人の一人だった」と結んでいます。

横浜で、上州から渡ってきた商人達が活躍出来た背景には、上州在地の生糸商達がいます。その商人達も莫大な利益を上げ、その資力を使い、前橋では廃城となっていた前橋城を再築し川越から松平の殿様を呼び戻します。さらに県庁を、高崎から前橋へ移しています。上州から横浜へのシルクロードは現在の私たちに多くのものを残してくれました。

シルクロード・ネットワーク・神戸フォーラム２０２２記録

●見学会：神戸市内見学会

【日時】2023 年 2 月 25 日（土）13:00-16:10

図 1：KIITO 展示物見学（解説：宮垣貴美代さん）

図 2：新港地区再開発地域見学

図 3：居留地 15 番館見学

図 4：交流会会場コンチェルト前集合写真

（写真撮影：田村　収）

●フォーラム

【日時】2 月 26 日（日）　10:00-15:10

【会場】KIITO 会議室

【開会挨拶】米山　淳一（公社）横浜歴史資産調査会常務理事）

【基調講演】「歴史まちづくりの可能性」

森井　康裕氏（国土交通省都市局公園緑地・景観課景観・歴史文化環境整備室課長補佐）

【基調講演】「伝統的建造物群制度を活かしたまちづくり」

大石　崇史氏（文化庁文化財第二課伝統的建造物群部門文化財調査官）

【基調講演】「神戸絹の道　『養蚕祕錄』を訪ねて」　次六　尚子氏（神戸ファッション美術館学芸員）

【基調講演】「1938・神戸港」－油彩画を調べてみたら　生糸貿易・博覧会などがー」

中村　善則氏（元・神戸市博物館学芸課長）

【基調講演】「未来を紡ぐカイコ」　鈴木　健夫氏（シスメックス株式会社学術研究部）

【基調報告】「養父市における養蚕関連施設の活用」　谷本　進氏（養父市教育委員会歴史文化財課）

【事例報告】「地域の絹遺産と活用・これから」

報告者：川越市・日野市・高知県奈半利町藤村製絲

コーディネーター：後藤　治（工学院大学理事長・（公社）横浜歴史資産調査会理事・RAC 理事）

総括・閉会　星　和彦（RAC 理事長・前橋工科大学名誉教授）

図 5　開会挨拶：米山　淳一

図 6　森井氏基調講演

図 7　大石氏基調講演

図 8　次六氏基調講演　　写真撮影：田村　収

図 9　中村氏基調講演

図 10　鈴木氏　基調講演

図 11　谷本氏基調報告

図 12　集合写真　　写真撮影：田村　収

●シルクロード・ネットワーク 第 5 号 レポート目次

・神戸フォーラム 2022 スケジュール 5
・見学会コース 7
・見学会建物案内 8
・講師プロフィール 11
・歴史まちづくりの可能性：森井　康裕
（国土交通省都市局公園緑地・景観課 景観・歴史文化環境整備室課長補佐） 13
・伝統的建造物群制度を活かしたまちづくり：大石　崇史
（文化庁文化財第二課伝統的建造物群部門文化財調査官） 18
・神戸絹の道－「養蚕秘録」を訪ねて：次六　尚子（神戸ファッション美術館学芸員） 22
・1938・神戸港－油彩画をしらべてみたら、生糸貿易・博覧会などが・・・：
中村　善則（元・神戸市博物館学芸課長） 26
・未来を紡ぐカイコ：鈴木　健夫（シスメックス株式会社学術研究部） 30
・養父市における養蚕関連施設の活用：谷本　進（養父市教育委員会歴史文化財課） 33
・神戸市内の文化財けんぞうぶつについて：千種　浩（元神戸市文化財課） 37
・旧神戸生糸検査所について：浜田　有司（神戸市役所） 40
・横浜の歴史を活かしたまちづくり：米山　淳一（(公社）横浜歴史資産調査会） 42
・「川越・前橋・横浜　絹のものがたりフォーラム」開催のご報告：
藤井　美登利（NPO 川越きもの散歩・さいたま絹文化研究会）43
・(国登録有形文化財)「旧農林省蚕糸試験場日野桑園第一蚕室」について：秦　哲子
（東京都日野市ふるさと文化財課）46
・横浜から神戸へ絹貿易に関わった「樋口家のシルクロード」：
河合　桃子（(公社）横浜歴史資産調査会）47
・大和国養蚕雑感：藤岡　一雄（RAC 顧問） 51
・長野市戸隠におけるれきしまちづくり：塚原　秀之（長野市教育委員会文化財課） 54
・糸都・製糸城下町 小諸：大西　崇弘（こもろ観光ガイド協会々長） 56
・前橋市と歴史まちづくり：星　和彦 58
・シルクロード・ネットワーク・南砺フォーラム 2019 記録： 60
・シルクロード・ネットワークの活性化にむけて：米山　淳一 62
・MEMO 63

●私たちの絹遺産のイメージ

□蚕種・養蚕・製糸に直接関わる建造物：

蚕種・養蚕民家及びそれに付随する建物、繭蔵（土蔵・れんが蔵)、蚕種・製糸・撚糸工場及び関連施設（水車、貯水槽、煙突、発電所等)、稚蚕飼育場、風穴（蚕種)、養蚕学校々舎・結社・各事業家の生家、居宅等

□蚕種・養蚕の生産に関わるもの：器械・器具、三分野(蚕種・養蚕・製糸)の技術、桑、桑畑、

□繭・生糸の販売、流通に関わる建造物：

絹・生糸問屋の店・住宅、生糸・繭蔵、繭・生糸市場（買場)・取引所・検査所等

□製品：絹織物（全国各地に伝わる絹織物)

□上記に関わる人物の物語、事跡、遺跡、遺物（渋沢栄一、尾高惇忠、田島弥平、片倉兼太郎、原富太郎（三渓園）等)

（例：群馬では、地域の資産家、豪農 、指導者たちが、新しい日本を築くための思想（自由・平等・博愛の精神）としてキリスト教を受容し、その精神は、養蚕製糸業の経営を支える大きな力となった。)

□運送・交通：運送業、鉄道、駅舎、河川、河岸

□集落：養蚕集落、絹産業で潤った町並

□信仰：神社等（蚕影神社、碑等)

□その他の建造物：絹産業で潤った飲食街、料亭等、娯楽・厚生施設(片倉館、岡谷病院)

□文物：養蚕指導書等、護符（新田義寄（温純)、徳純、道純、俊純の猫絵、少林山の縁起達磨等)

□習俗：養蚕製糸に関わる習俗、お祭り、お祝いの絵札等

－シルクロード・ネットワークの活性化にむけて－

横浜は絹貿易拠点として栄え、現在の発展は絹によって築かれたと言っても過言ではありません。とはいえ、現代の都市開発の中で、絹産業の記憶が、正当に評価されることなく忘れ去られようとしている事実もあります。横浜には、絹産業が築き上げた建造物等の遺産や膨大なシルク関連資料、そうした資料の中にしか見られない多くの先人達の物語等が残されており、私たちは、これらを明日の横浜に伝えていくべき地域資産として考えています。そして、これらは横浜単独で出来たものではなく、多くの地域と結びつき、先人達の着想と努力で築き上げられたものです。横浜から絹の道を辿ると全国に及び、各地に蚕種・養蚕・製糸・織物・流通等の絹遺産が今も息づいています。また、富岡製糸場の世界遺産登録をはじめ、近年、蚕種や養蚕で繁栄した町が重要伝統的建造物群保存地区に選定されたり、製糸工場や鉄道関連施設が重要文化財に指定されたりして、絹産業遺産が、重工業だけでなく日本の近代産業遺産として目を向けられつつあります。

国指定重要文化財　氷川丸昭和５年（１９３０）横浜ーシアトルを結ぶ貨客船として建造。生糸専用の船室を設置。

写真：米山淳一

こうした事実を踏まえ、絹文化の足跡を振り返り、文化遺産として将来に亘り継承していくことと、地域活性化の切り札として活かす手だてを多くの地域と連携して創り上げる為に、2015 年 3 月に「シルクロード・ネットワーク協議会」を設立し、地域連携の第一歩として横浜フォ-ラムを開催いたしました。その後、山形県新庄市、福島県福島市、山形県鶴岡市、富山県南砺市、昨年は兵庫県神戸市と連携の環を拡げて参りました。そして、今年は横浜で開催いたします。

これからも全国の絹関連団体や市町村と連携を深め、将来にわたり絹文化の調査、保全、活用提言等に邁進いたして参ります。つきましては、是非、「シルクロード・ネットワーク協議会」へ、皆様のご協力、ご参加をお願い申し上げます。

米山　淳一

＜ご 入 会 案 内＞

１．年　会　費　毎年４月１日～翌年３月３１日

個人会員　　３，０００円

団体会員　１２，０００円

賛助会員　１２，０００円

２．連　絡　先　シルクロード・ネットワーク協議会（公益社団法人横浜歴史資産調査会内）

住　所：神奈川県横浜市中区相生町 361　泰生ビル 405

Tel：045-651-1730　E-mail: yh-info@yokohama-heritage.or.jp　（担当：米山・河合）

memo

横浜第２合同庁舎（旧生糸検査所）：撮影　米山　淳一

シルクロード・ネットワーク・横浜フォーラム２０２３

発行年月　２０２４年３月

編集・発行　公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）
tel：045-651-1730　mail：yh-info@yokohama-heritage.or.jp
NPO 法人　街・建築・文化再生集団（略称 RAC）
tel：027-210-2066　mail：act@npo-rac.org

今回も名古屋朝日軒さんにご協賛頂きました